

# トルコ語のナゾナゾ分析

城 生 佰太郎

## 1. はじめに

筆者の開講している大学院「一般言語学研究」に、今年度はたまたまトルコ共和国からの留学生 Deniz Bökesoy (デニース・ビョケソイ) さんが参加しているので、現代トルコ語の記述言語学的研究を行なうのに絶好の機会と考えた。そこで、Deniz さんにインフォーマントとしてご協力を頂き、トルコに古くから伝わる口承文芸の一分野をなす「なぞなぞ」の分析を行なうこととした。

なぞなぞを選んだ理由は、主に以下に掲げる4点にある。

- (1) 口承文芸の一分野をなすところから、外形に現れた構造にみごとな整合性がある。すなわち、端的に述べれば音韻面に整然とした体系性が見られることが予測される。
- (2) なぞなぞは、表向きは遊戯的側面を露呈しているが、反面長い年月を掛けて積み上げられてきた民衆の知恵と生活臭が、短い言語形式の中に凝縮されている。従って、記述されたデータが単なる言語学的資料に留まらず、文化人類学的、歴史学的資料としても価値を持つ。
- (3) モンゴル語やトゥングース語など、他のアルタイ諸語との対照研究を行なう際に、共通したコーパスとして極めて短く、しかも体系的によくまとまっているために、利用価値が格段に高い。
- (4) インフォーマントにとっても比較的興味が持てる題材なので、献身的な協力をしてきているインフォーマントに退屈をさせないで済む。

## 2. 方法論

本研究に用いた方法論は、大きく分けると3種類になる。

第1は、伝統的な記述言語学の方法の採用で、インフォーマントをつとめて

頂いた Deniz さんの肉声を、IPA によって調音音声学的観点から記述する。

第 2 は、Jakobson (1960) によるいわゆる Poetical analysis の適用で、資料の音形面に特段の注意を払った記述を行なっている。具体的な着眼点を、同著訳本である川本茂雄監修 (1973: 193) より一部引用すると、

「アイクを愛す」“I like Ike”/ay layk ayk/という簡潔な構造の政治スローガンは、3 個の単音節語から成り、3 個の二重母音/ay/を数え、その各々には/…l…k…k/と一つずつの子音が均齊的に続く。3 語の組成は変化を見せている。第一の語には子音音素が含まれず、第二の語では二重母音をはさんで二つの子音音素があり、第三の語では語末の子音が一つある。同じような/ay/という支配的核音の存在を、ハイムズはキーツの若干のソネットの中に、指摘している。<sup>\*1)</sup> “I like/Ike” という 3 音節の文句の二つのコーロン (colon)<sup>\*2)</sup> は互いに脚韻を踏み、韻を踏む二語のうち第二のものは第一のものの中に完全に包まれていて (こだま式押韻、すなわち/layk/-/ayk/で)、対象を全的に包み込んでいる感情の類音法的な映像を成している。二つのコーロンはまた互いに頭韻を踏み、二語のうち第一のものは第二のものに包含されて、愛する主体が愛される客体によって包み込まれていることの類音法的映像になっている。この選挙用キャッチフレーズの副次的な詩的機能が、その重みと効きめを補強しているのである。

\*1) Dell Hymes, “Phonological Aspects of Style: Some English Sonnets”, *Style in Language*, pp. 109-131.

\*2) colon: 詩の一行中で、韻律上一単位となる部分。

となる。すなわち、個々の子音や母音に注目するのではなく、それらの連鎖に注目することによって、プロソディーのレベルから全体の音韻構造を俯瞰しようとする視点がこれである。

なお、筆者もすでに城生佰太郎 (1984) において、モンゴル語を対象とする同種の分析を試みてはいるが、同書が学術論文ではなく一般読者を対象としたものであったために、徹底した分析は行っていない<sup>1)</sup>。

最後に第 3 として、いわば筆者のお家芸といったところだが、資料すべてを KAY 社の CSL (Computerized Speech Lab) および Multi Speech にかけて

音響音声学的方法によって解析し、調音音声学の記述の裏づけとした<sup>2)</sup>。

### 3. インフォーマントおよび資料の記述方針

#### 3.1 インフォーマントのフェイスシート

記述にご協力を頂いたインフォーマントに関する情報は、次の通りである。

名前：Deniz Bökesoy (デニーズ・ビョケソイ) 氏

性別：女性

生年月日：1971年12月23日

成育地：4～5歳から12～3歳までをトルコ共和国のアンカラで過ごす。  
従って、標準トルコ語を話す話者だと判断される。

その他の情報：父親の出身地はイスタンブール、母親は少し南に下ったアダナである。また彼女の発音は明瞭であり、かつわれわれのリクエストに対して極めて好意的に答えてくれる、大変良いインフォーマントである。

#### 3.2 資料の記述方針

発話資料に関しては、対象がトルコ語であるところから、本稿では特に母音調和に着目してその構造をあぶり出すよう努力した。従って、次節において展開される分析結果は、(1)原綴、(2)母音部だけの音韻表記、(3)男性母音(M)と女性母音(F)の別、だけが述べられている。なお、(2)のレベルで母音音素の上につけてある記号は、アクセントを示す。また、各音素に対応する具体的な音声を、典型的なものだけに絞ってIPAで表記すれば、次のようになる。

## 男性母音

非円唇 /a/ = [a], /ɨ/ = [ɯ]

円唇 /o/ = [o], /u/ = [u]

## 女性母音

非円唇 /e/ = [ɛ], /i/ = [i]

円唇 /o/ = [œ], /u/ = [y]

## 4. 分析結果

## 4.1 Çarşıdan aldım bir tane,

バザーから 買った 一つ

Eve geldim bin tane

うちに 来た 千個

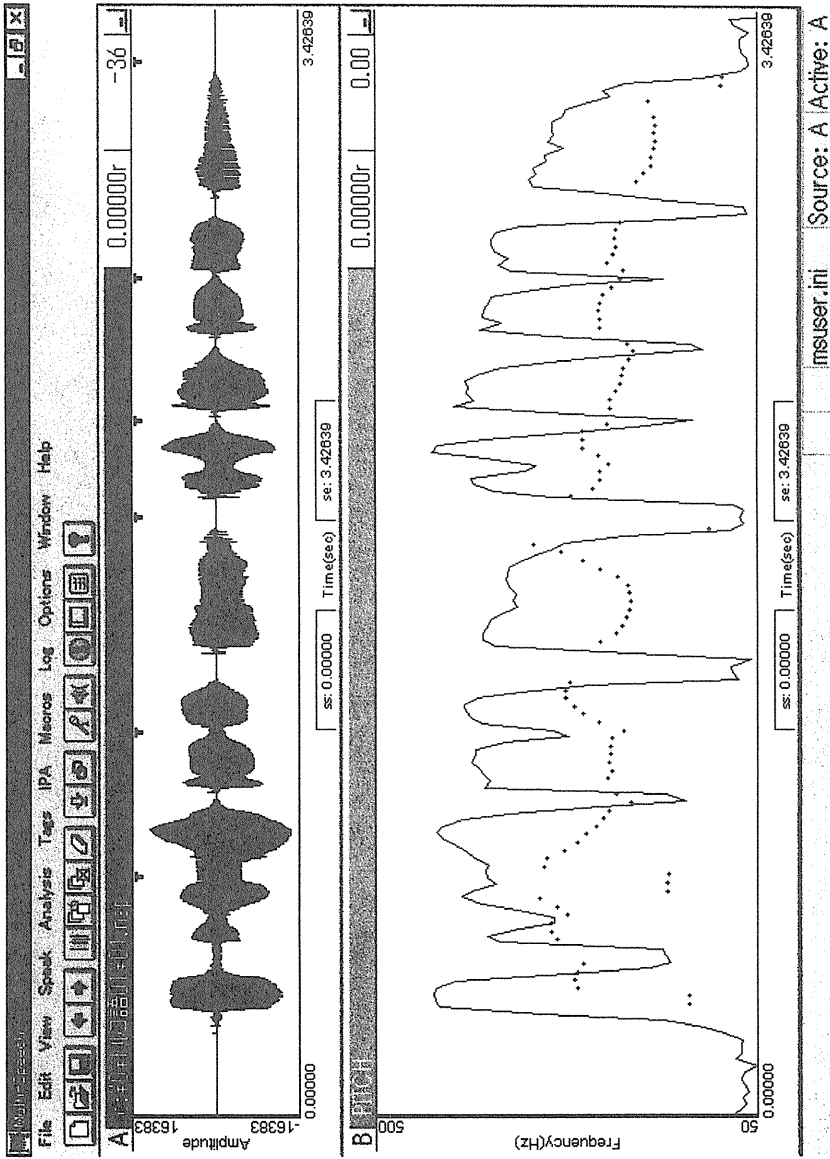
【答え：nar ざくろ】

a ɨ á	a í	i a é
-------	-----	-------

e é	e í	i a é
-----	-----	-------

MMM MM FMF

FF FF FMF



## 4.2 Küçük fıçık,

小さい 樽

İçi dolu turşucuk

中 いっぱい 漬物

【答え：limon レモン】

ü ü ú

ı ı í

i í

o ú

u u ú

F F F

M M M

F F

M M

M M M

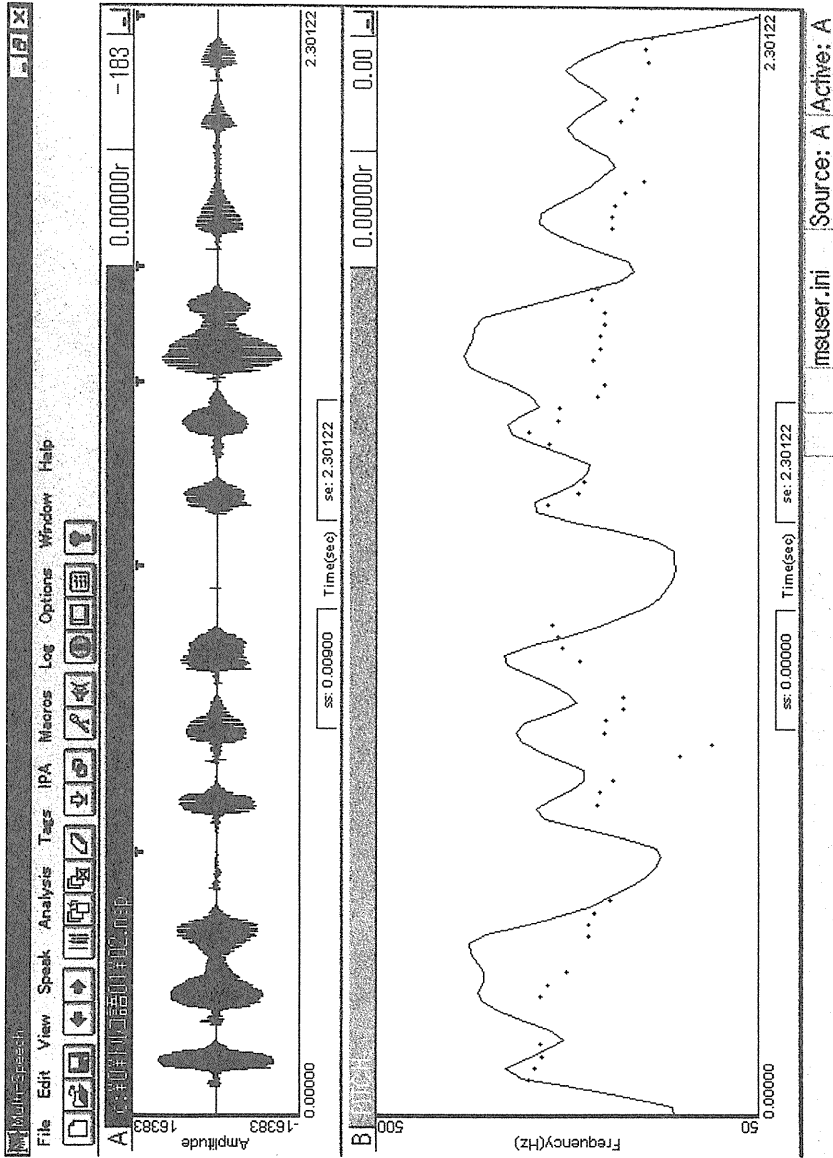


図 2

4.3 Bilmece bildirmece,  
知る(なぞ) 知らせる

Dil üstünde kaydırmaca  
舌 上で 滑らせる

【答え：dondurma アイスクリーム】

i e é

i i e é

i ü ü é

a ı a á

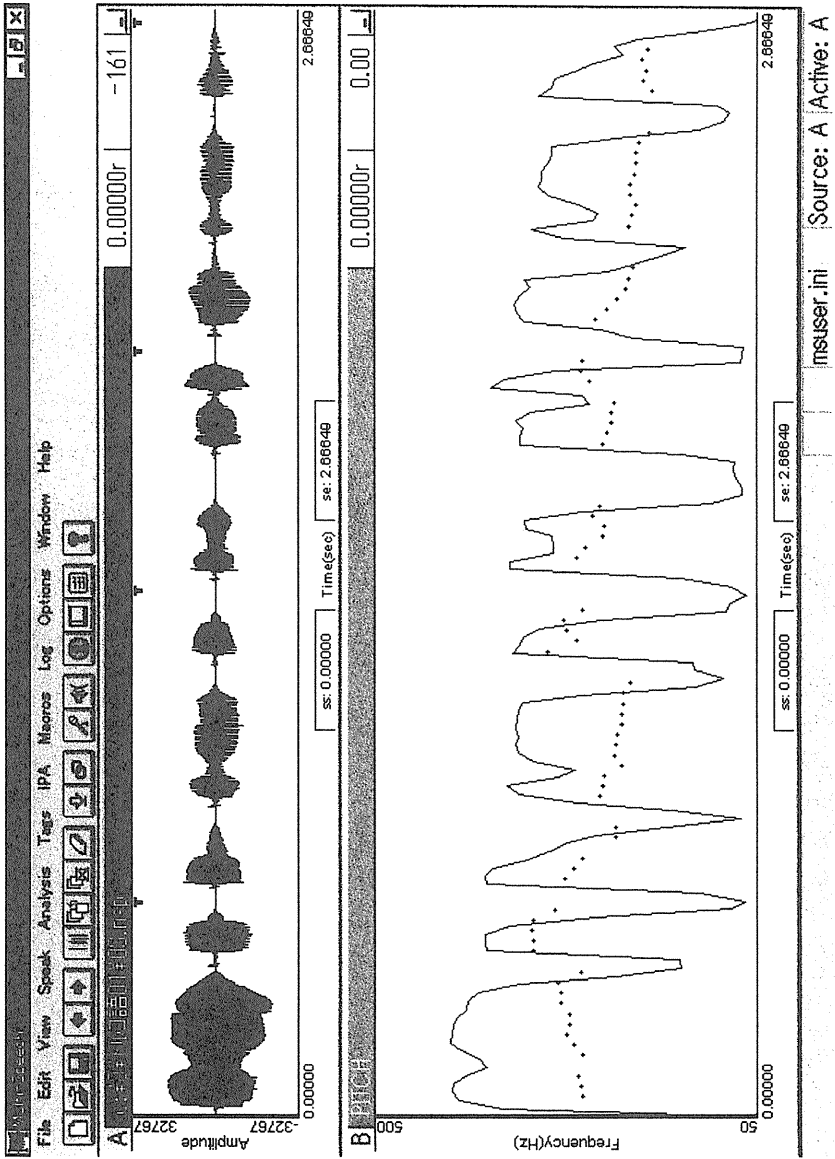
F F F

F F F F

F F F F

M M M M





4.4 Biz bizidik bizidik,  
私たち 私たちだった 私たちだった

Otuziki kız idik  
32人 女子 だった

Ezildik büzüldük,  
踏まれた はさまれた

İki duvara dizildik  
2つ 壁に 並べた

【答え：diş 歯】

í      i i í      í i ì

o u i í      i i í

e i í      ü ü ú

i í      u a á      i i í

F      F F F      F F F

F F F F      M F F

F F F      F F F

F F      M M M      F F F

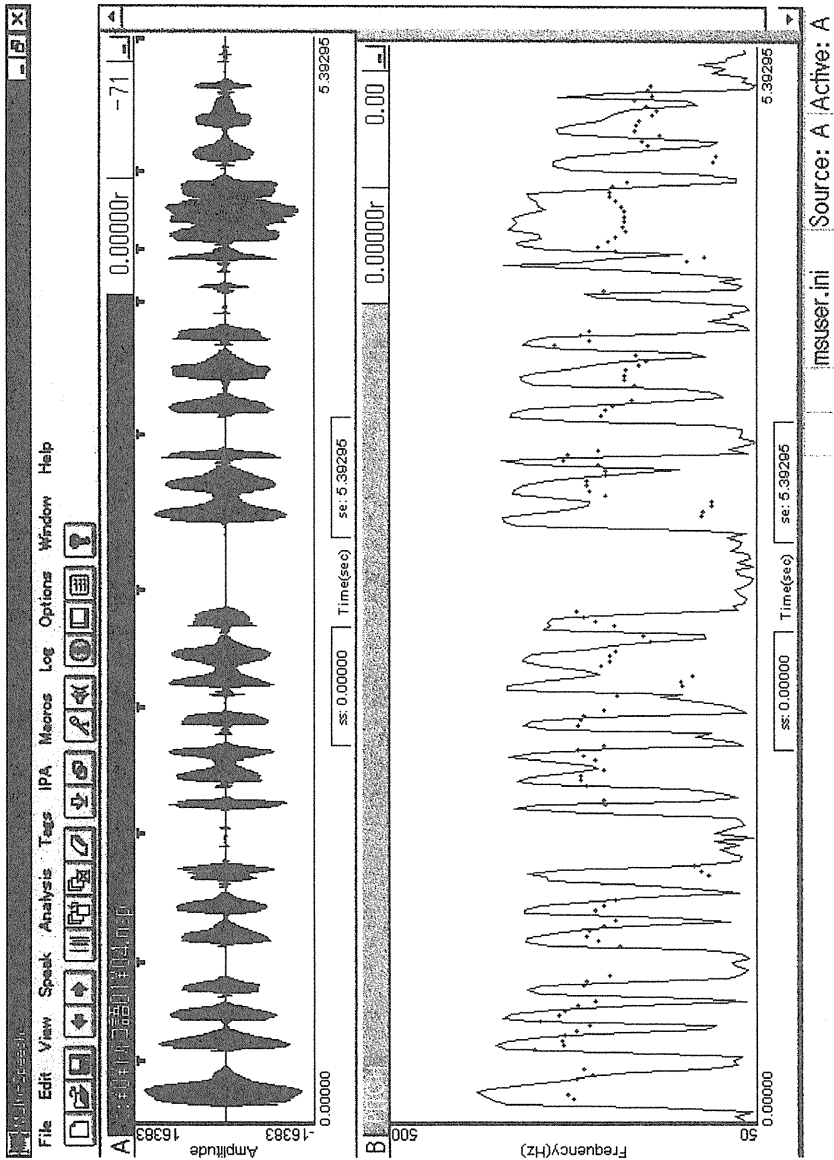


図 4

## 4.5 Karşıdan baktım taş,

向こうから 見た 石

Yanına gittim dört ayak bir baş

近寄った 4つ 足 1つ 顔

【答え：kaplumbağa 亀】

a i á

a i á

a i á

i í

ö a á

i á

MMM

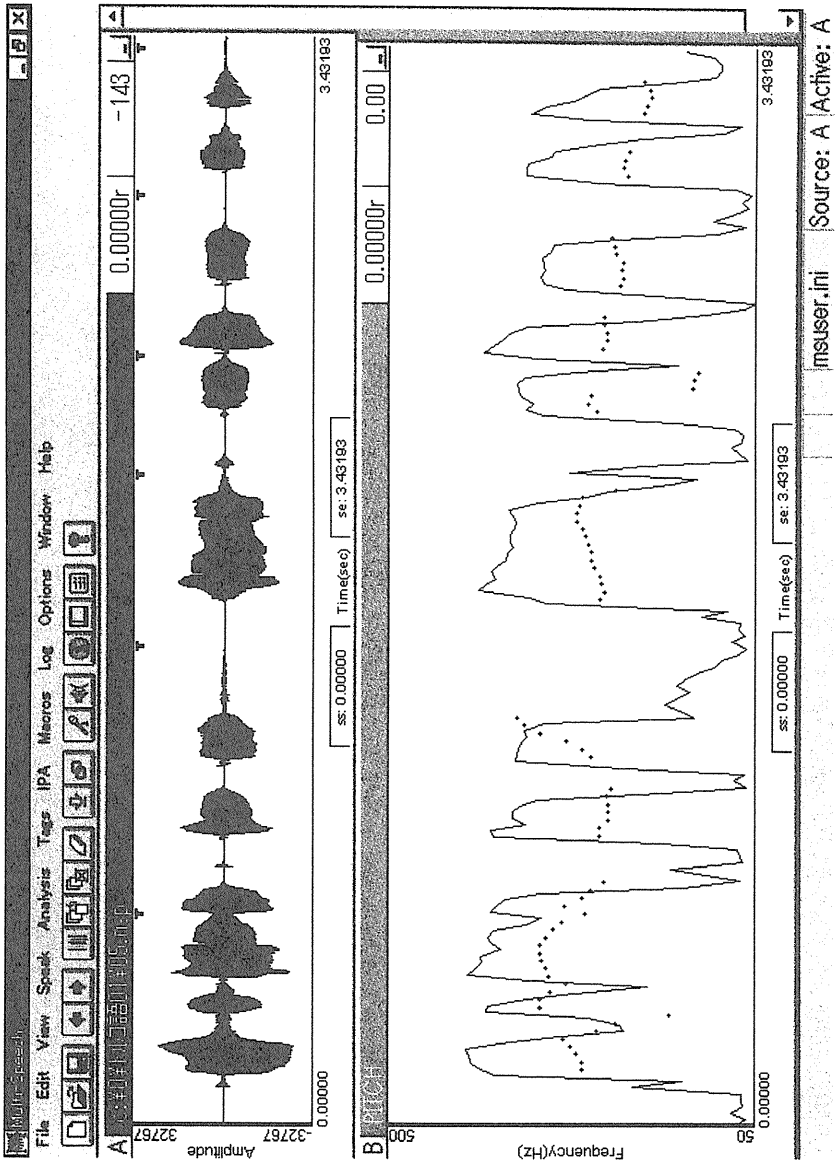
MMM

MMM

FF

FMM

FM



## 4.6 On ay yatar,

十カ月 寝る

iki ay kalkar.

二カ月 起きる

Feneri yakar

ランプを つける

etrafa bakar

周りを 見る

【答え：ateşböceği 蛍】

o a a á

i i a a á

e e i a á

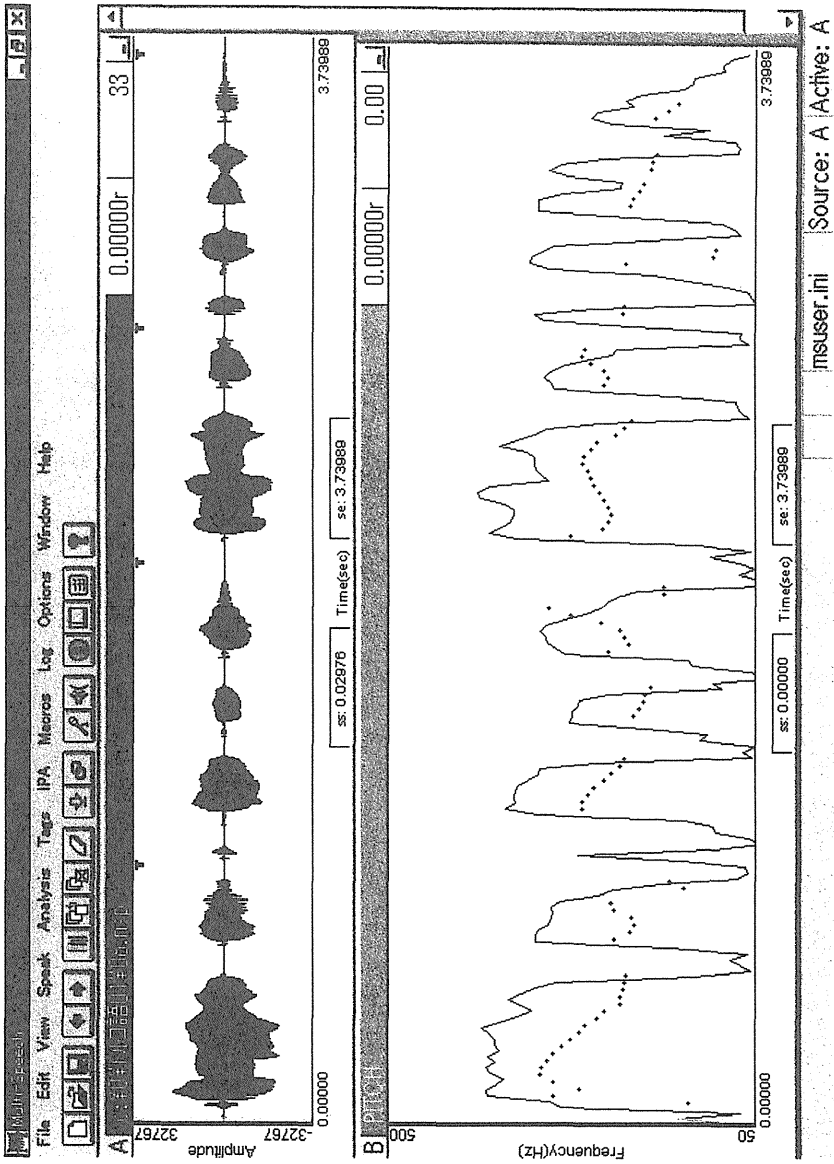
e a a a á

MMMM

F F MMM

F F F MM

F MMMM



4.7 Üstü çayır biçilir,  
上 草むら 刈られる

Altı çeşme içilir  
下 蛇口 飲まれる

【答え：koyun 羊】

ü ú a í i i í

a í e é i i í

F F MM F F F

MM F F F F F



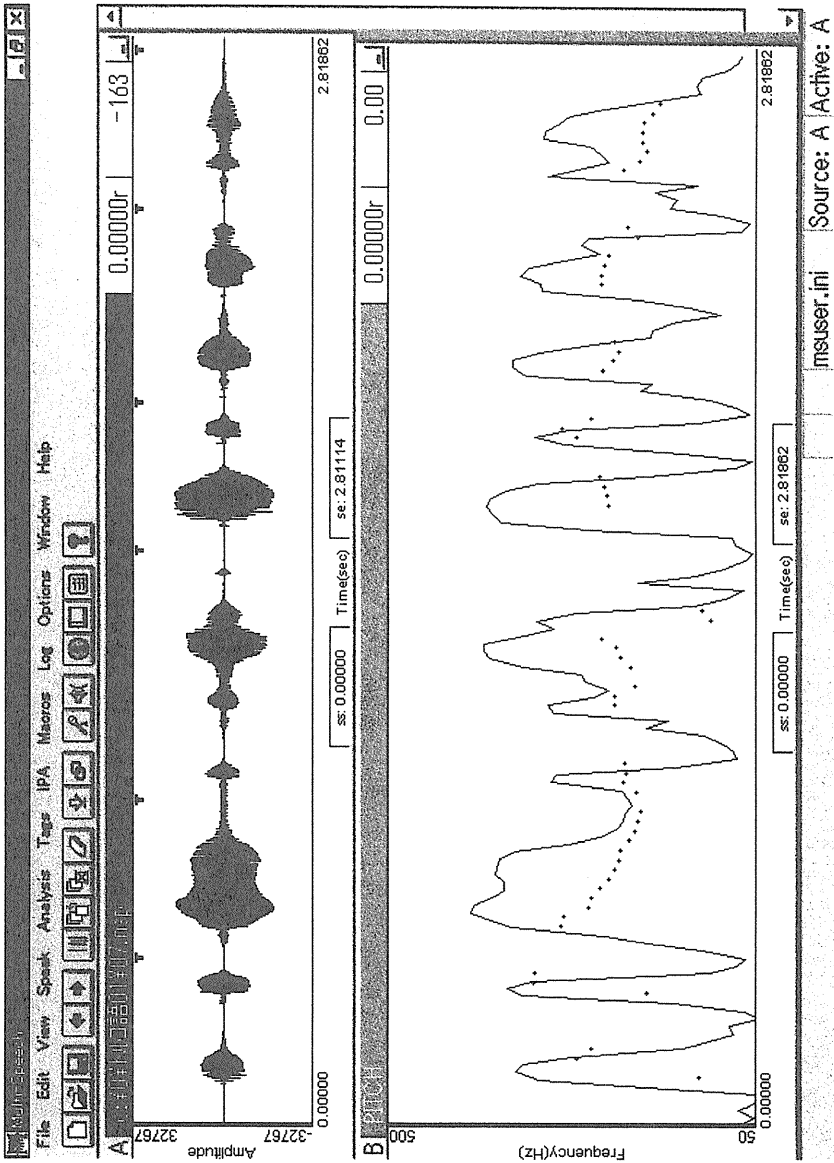


図 7

4.8 Kul görür,  
人間 見る

Allah görmez  
神様 見ない

【答え：rüya 夢】

ú

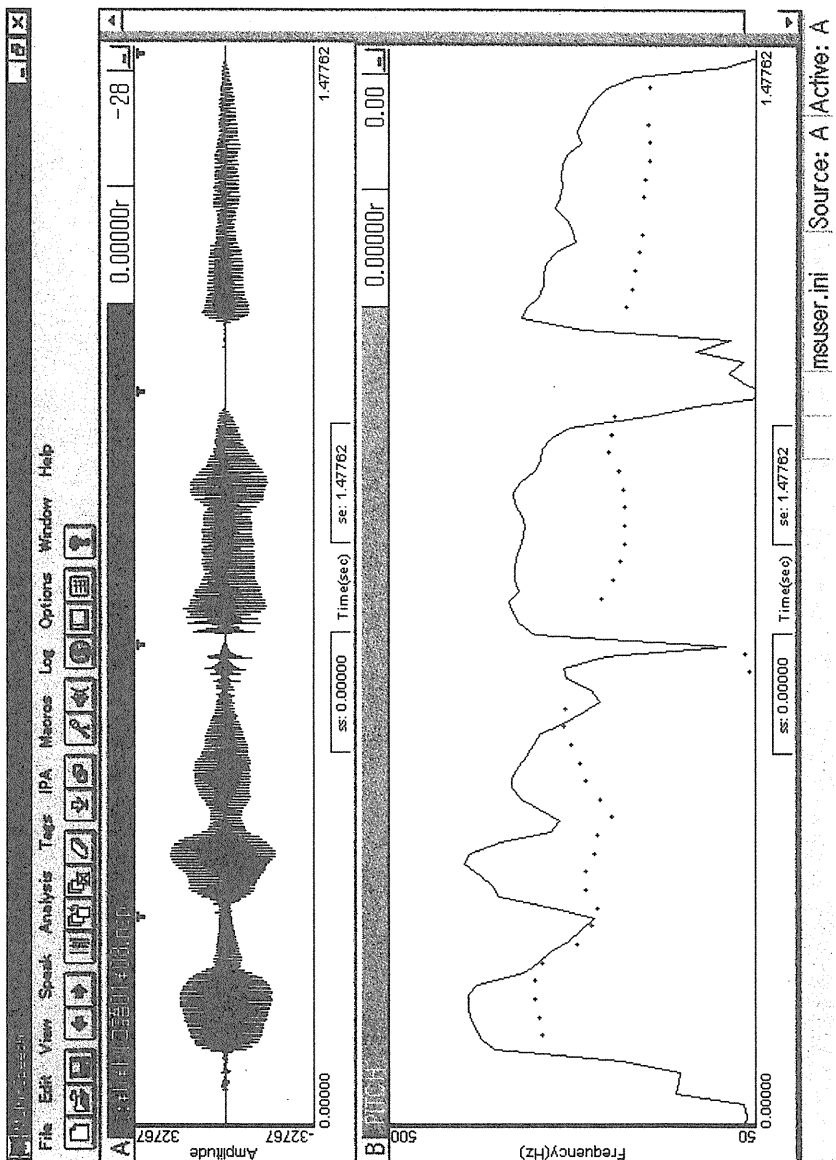
ö ú

a á

ö é

M F F

MM F F



## 4.9 Ufacık mermer taşı,

小さい 大理石

İçinde beyler aş1,

なかに ご馳走

Pişirirsen aş olur,

煮たら 食事になる

Pişirmezsен kuş olur,

煮られなかったら 鳥になる

【答え：yumurta 卵】

u a í

e e a í

i i é

e e a í

i i i é

á o u

i i e é

ú o u

MMM

F F M M

F F F

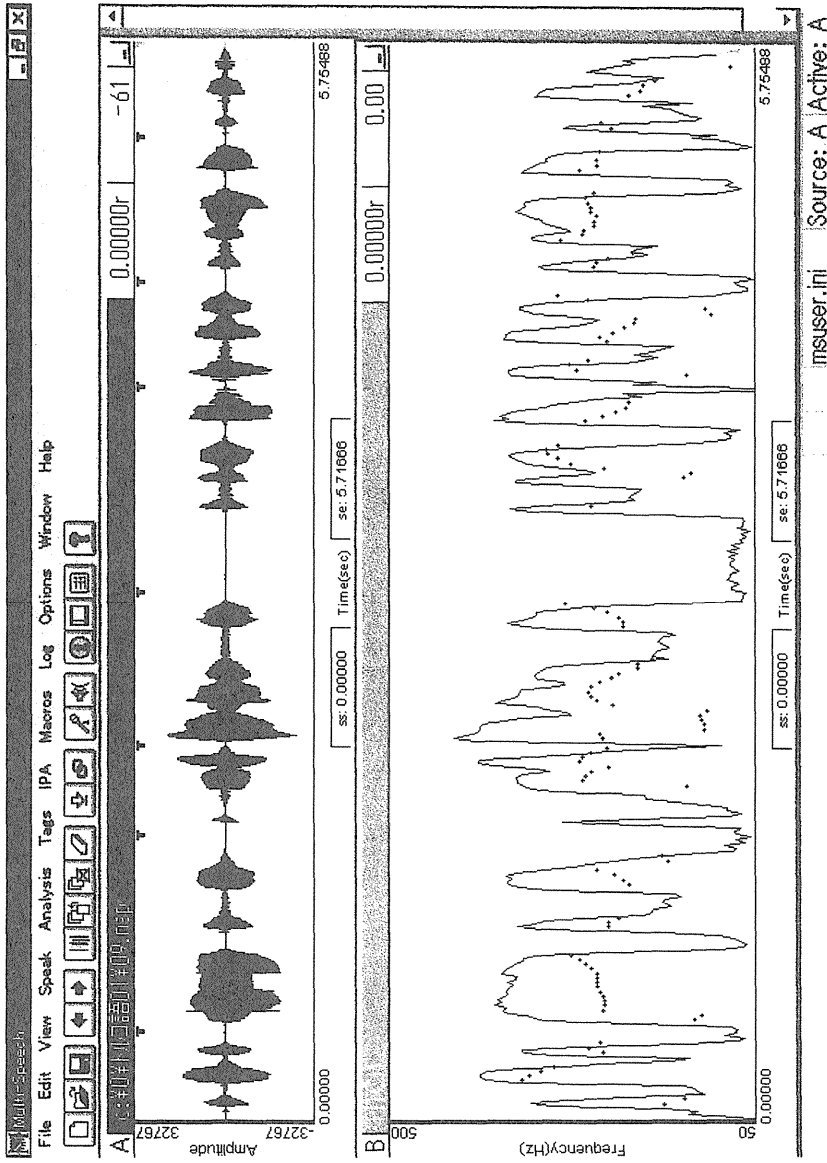
F F M M

F F F F

M M M

F F F F

M M M



4.10 Baldan tatlı, baltadan ağır,  
 蜂蜜より 甘い 斧より 重い

Elde tutulmaz, çarşıda satılmaz,  
 手で 摘めない バザーで 売っていない

Mendile konulmaz,  
 ハンカチに 置けない

tadına doyulmaz  
 その味に 諦められない

【答え：uyku 寝る】

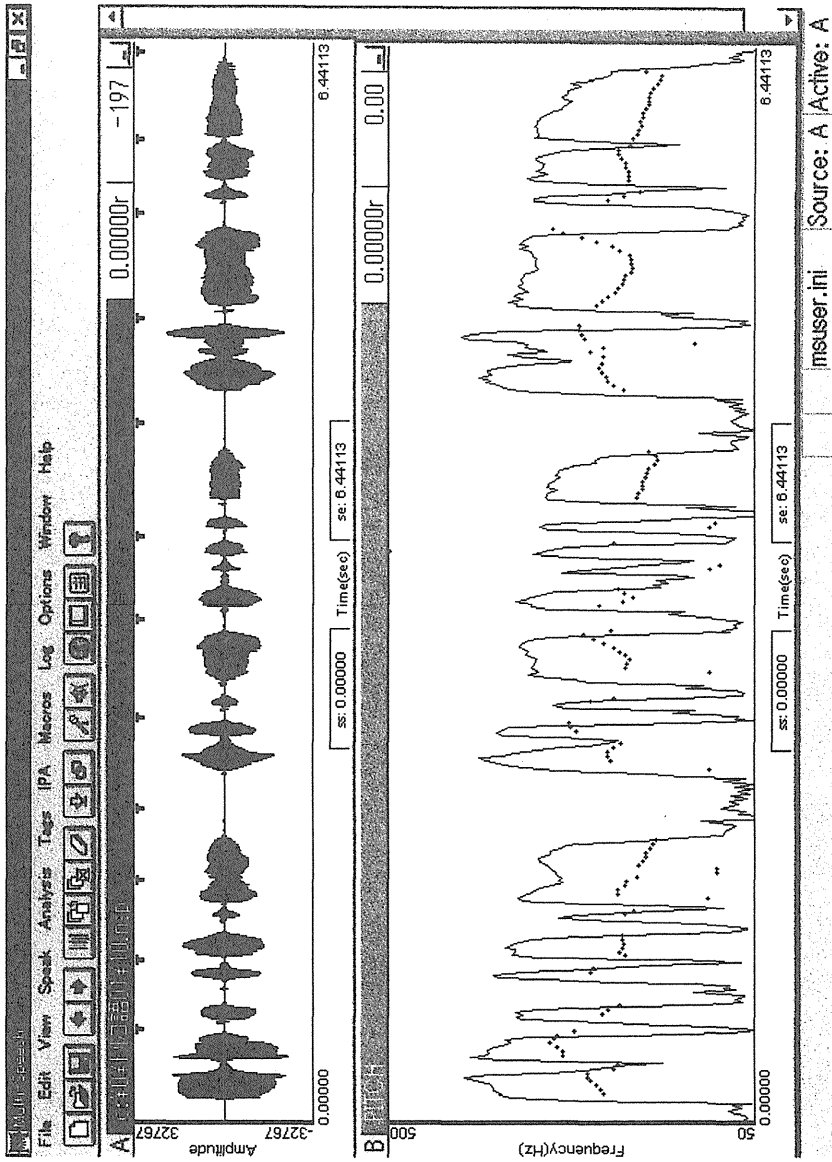
a á a í a a á a í

e é u u á a í á a í á

e i é o u á

a u á o u á

MM MM MMM MM  
 FF MMM MMM MMM  
 FFF MMM  
 MMM MMM



4.11 Bir kızım var,  
一人の娘 いる

Gelen öper giden öper  
来る人 キスする 行く人 キスする

【答え：su bardağı グラス】

í ı í á

e é ö é

i é ö é

F MM M

F F F F

F F F F



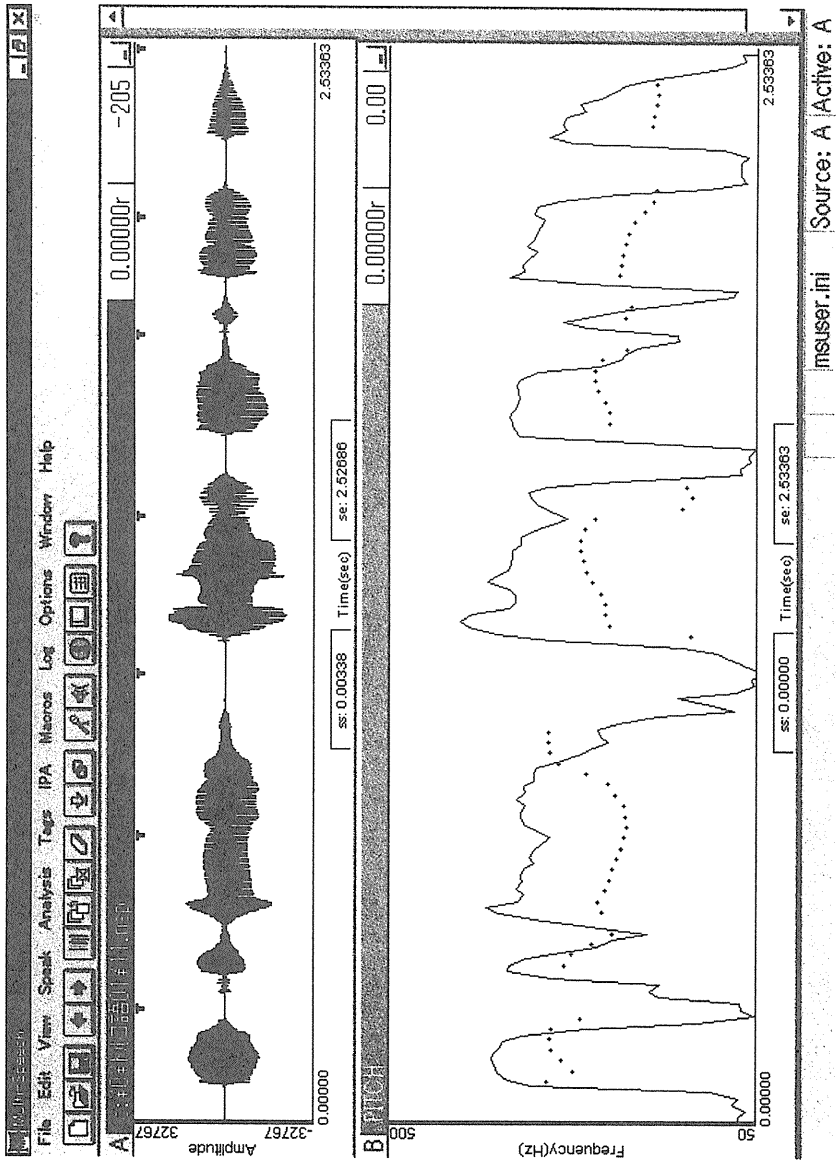


図11

4.12 İstanbul'da süt pişti,  
 イスタンブールで 牛乳 沸いた

Kokusu buraya düştü  
 その匂い ここまで 来た

【答え：mektup 手紙】

i á u á ü i í

o u ú u a á ü ü

FM MM F FF

MMM MMM MM

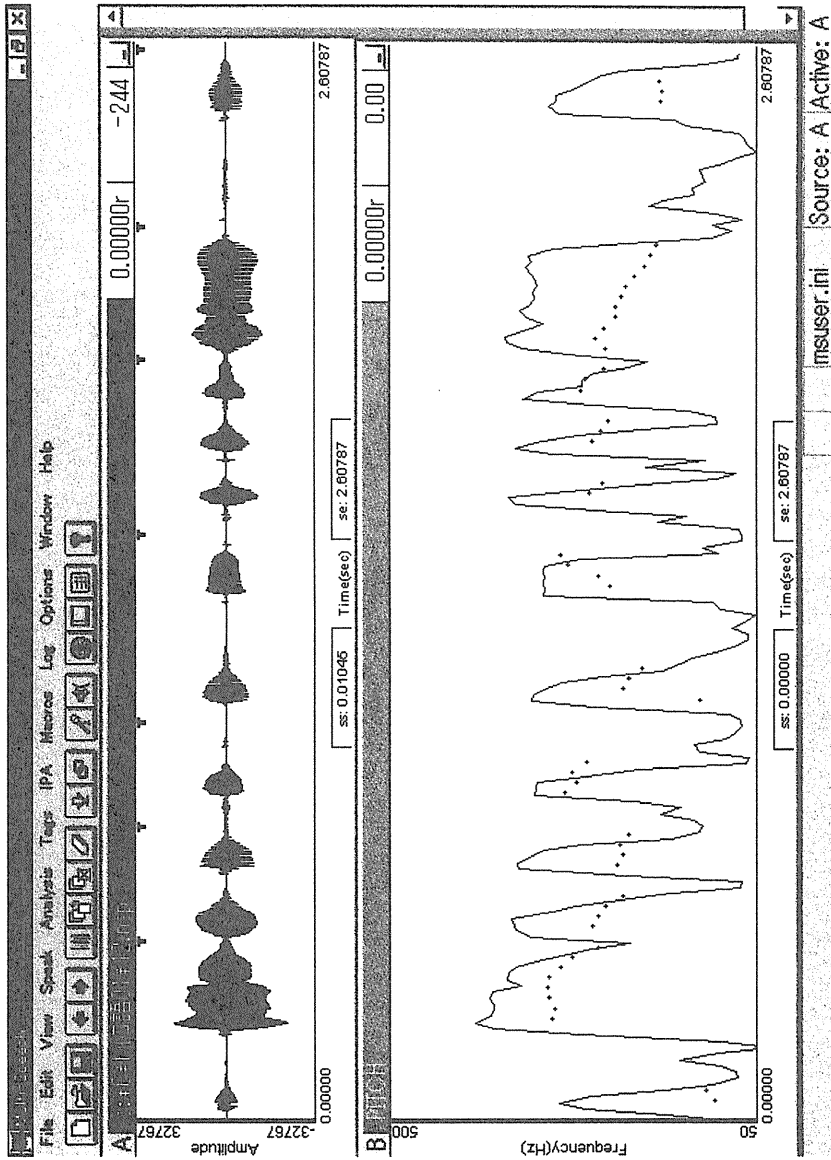


図12

4.13 Parasını el alır,  
そのお金 他人 貰う

Dumanını yel alır  
その煙 風 貰う

【答え：sigara タバコ】

a a ı í é a í

u a ı í é a í

MMMM F MM

MMMM F MM

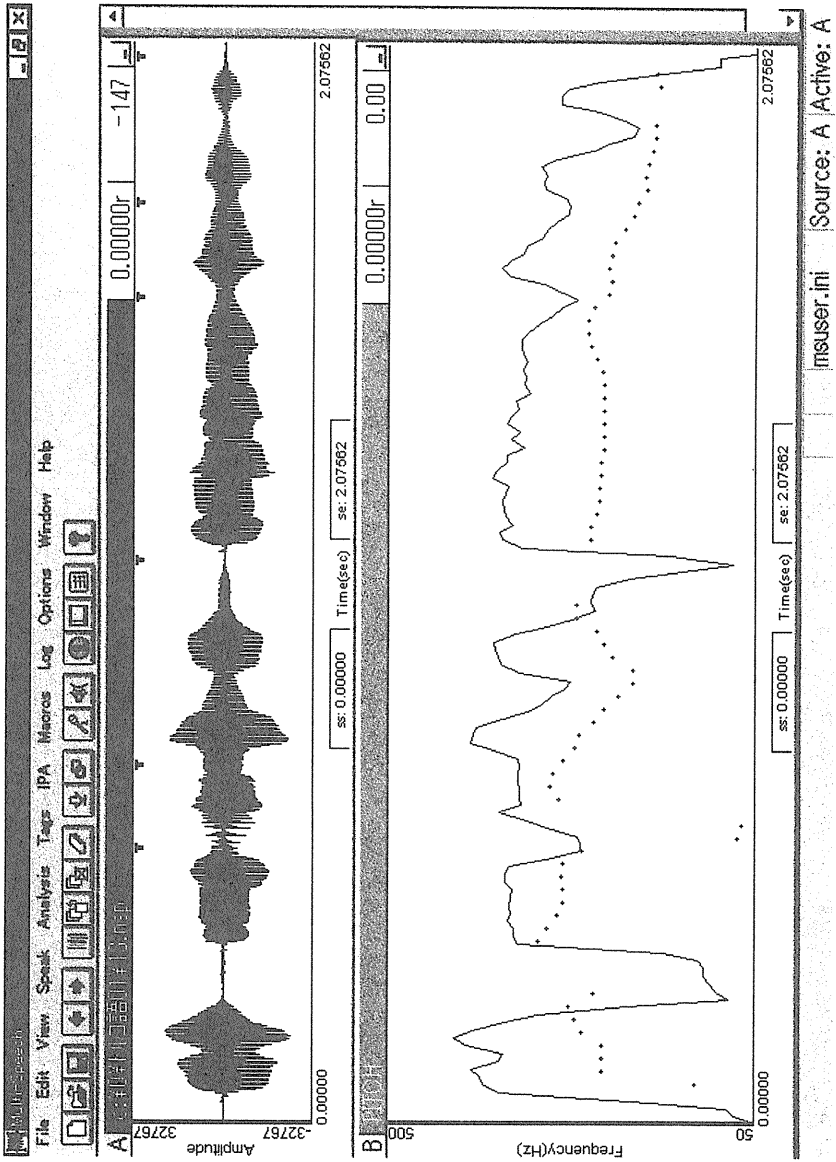


図13

4.14 Ufak ufak odalar,  
小さい 小さい 部屋

Birbirini kovalar

追いかっこをしている

【答え：tren 列車】

u á      u á      o a á

i i i í      o a á

MM      MM      MMM

F F F F      MMM

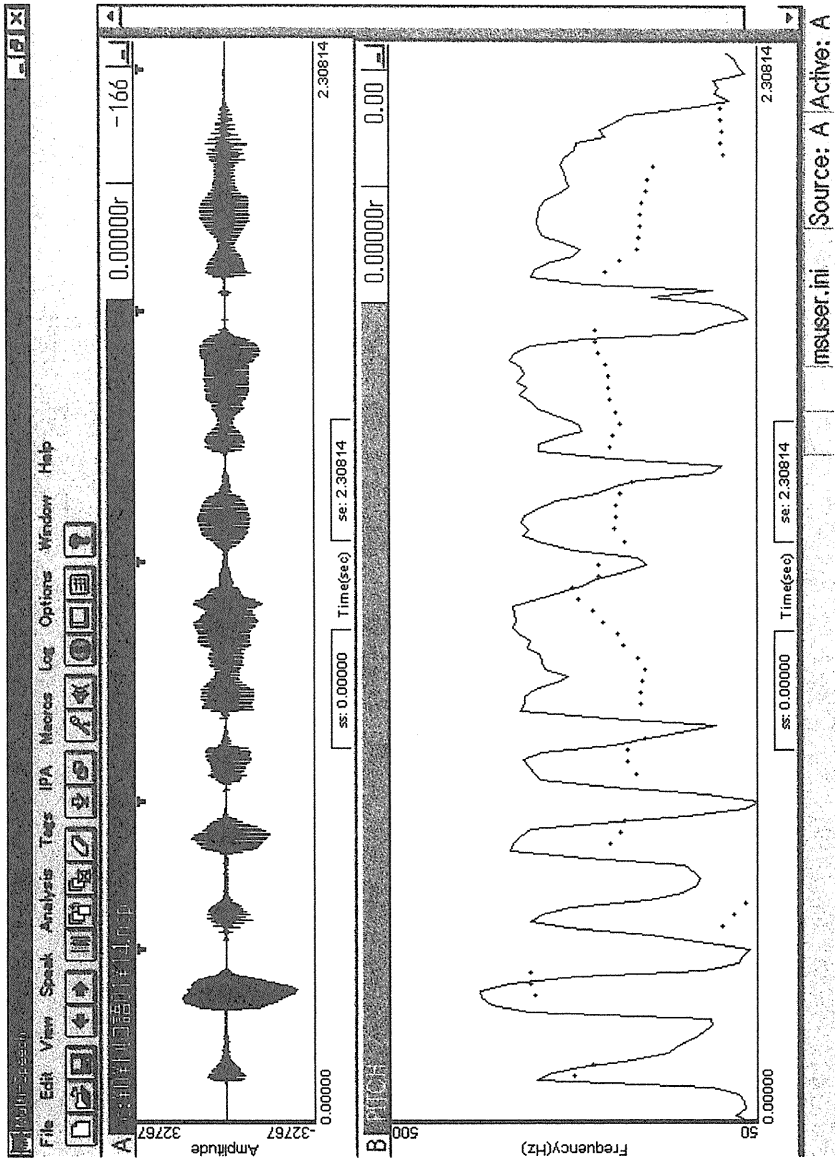


図14

## 4.15 Mavi tarla üstünde,

青い 畑 上に

Beyaz güvercin yürür.

白い はと 歩いている

【答え：yelkenli ヨット】

a í	a á	ü ü é
-----	-----	-------

e á	ü é	i ü ú
-----	-----	-------

MF MM FFF

FM FF FFF



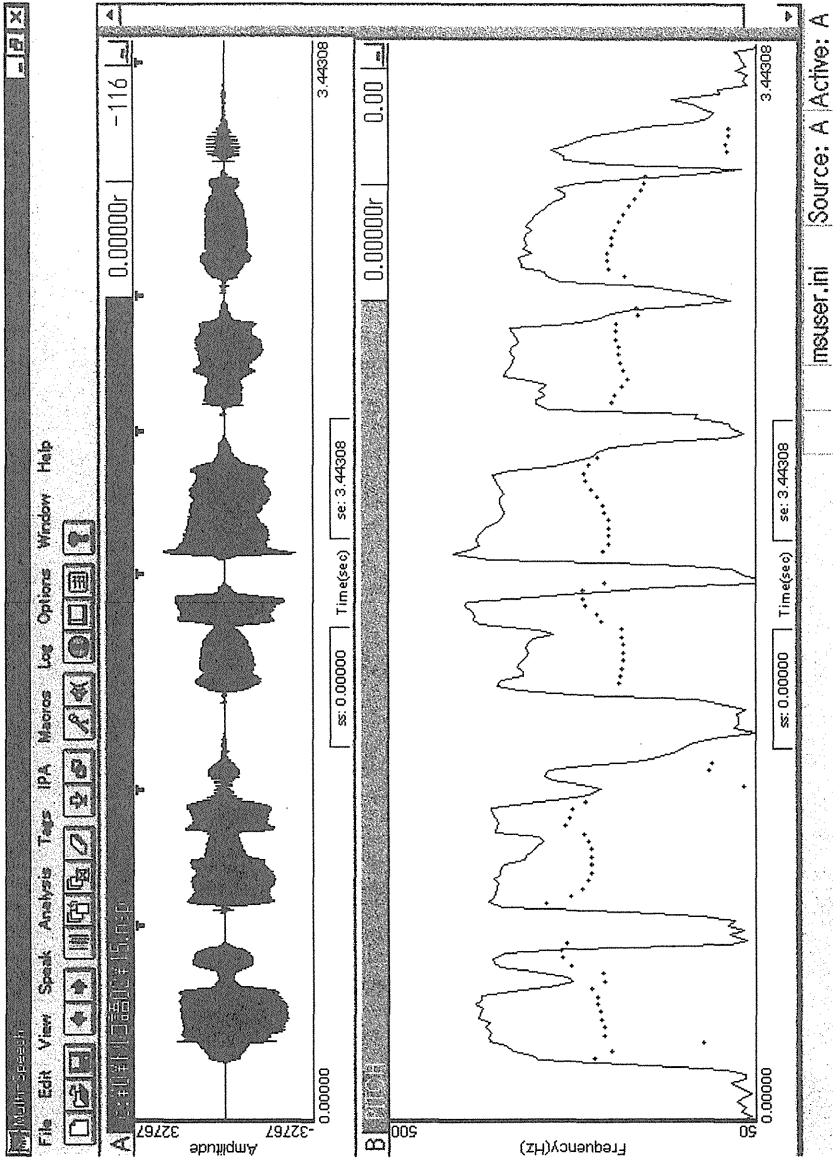


図15

4.16 İçi ateş dışı taş,  
なか 火 外 石

Biri kuru biri yaş  
一つ 乾いている 一つ 濡れている

【答え：dünya 地球】

ı í a é ı ı á

ı í u ú i i á

F F M F M M M

F F M M F F M

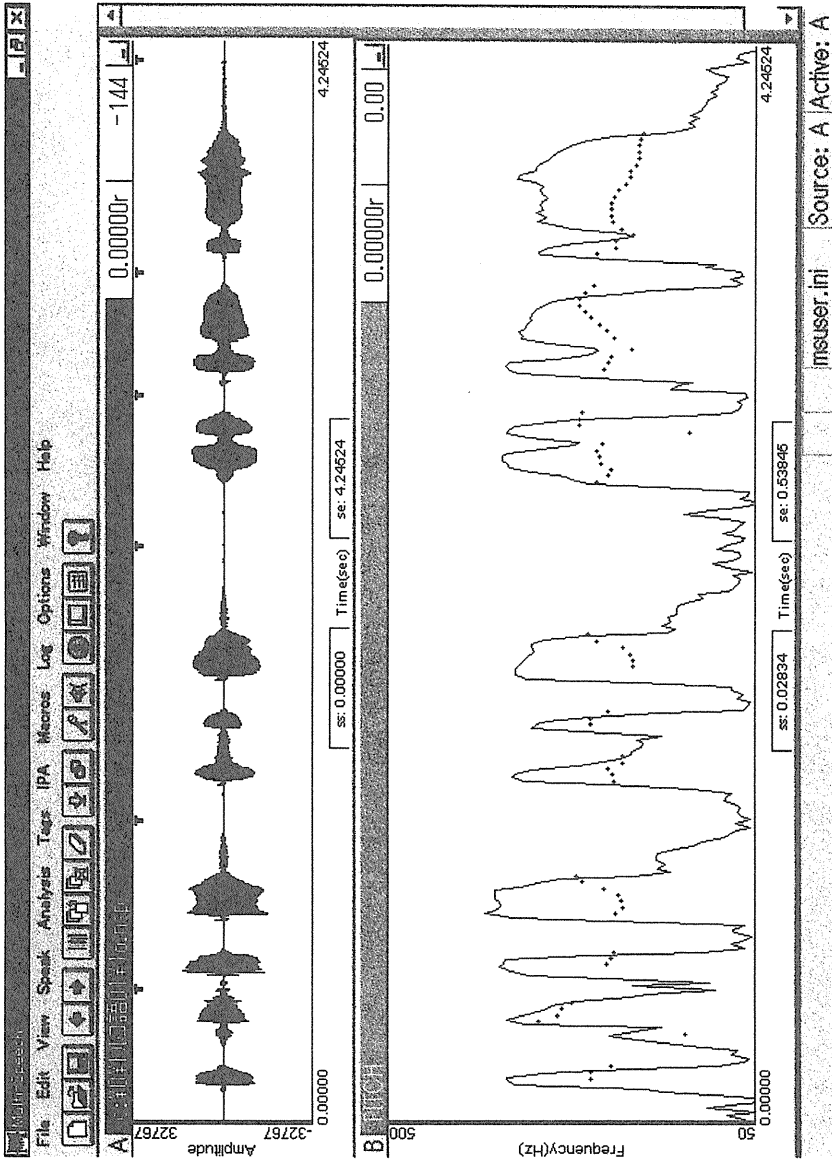


図16

4.17 Gökte gördüm bir köprü,  
 空に 見た 一つの 橋

Rengi var yedi türlü.  
 色 がある 七 種類

【答え：gökkuşağı 虹】

ö é    ö ü í    ö ú

e í    à e í    ü ú

F F    F F F    F F

F F    M F F    F F

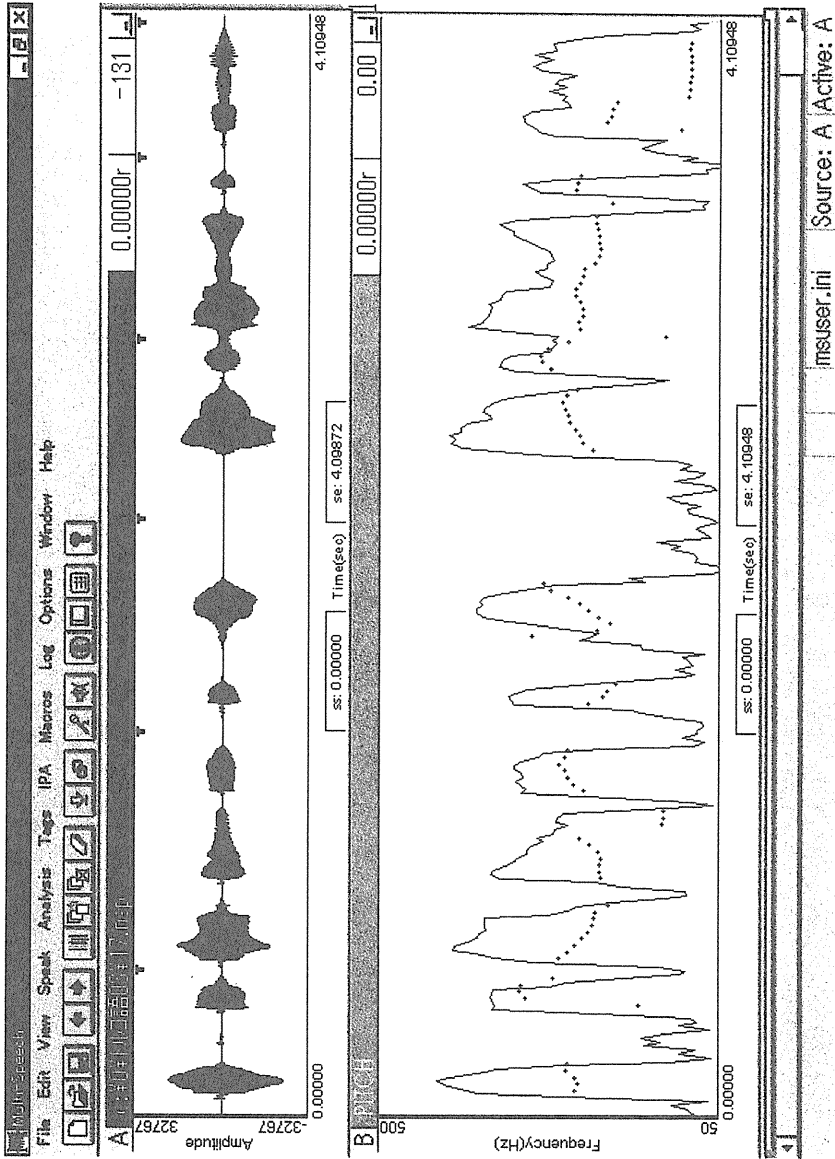


図17

4.18 Ağaç üstünde kilitli sandık.  
木 の上に 鍵のかかった 箱

【答え：ceviz 胡桃】

a á

ü ü é

i i í

a í

F F

M F

M M M

F F

M M

F F M

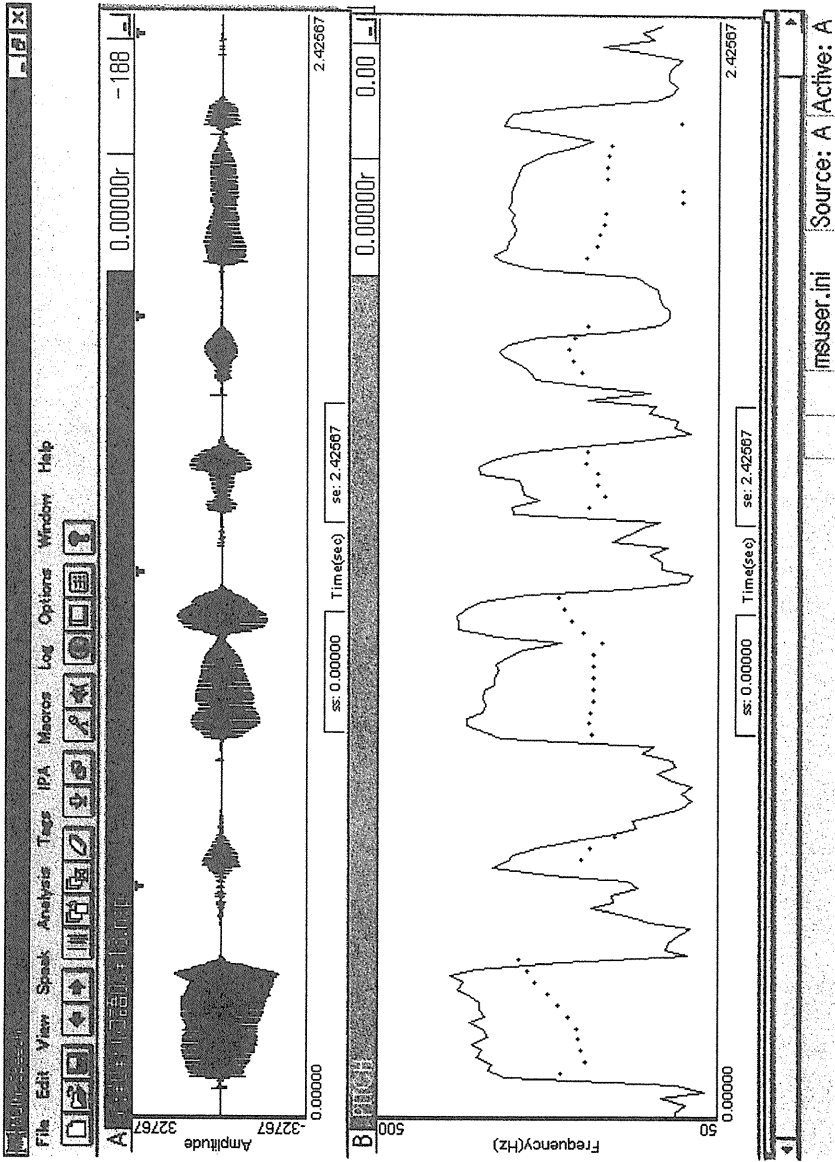


図18

4.19 Bize bir misafir geldi :

うちに 一人 お客さん 来た

Yeşil feraceli,

緑の ベール

kırmızı entarili,

赤い ドレス

siyah düğmeli.

黒い ボタン

【答え：karpuz すいか】

i é

i i ā í

e í

e í

e a e í

i i í

e ā i í

i á

ü e í

FF

FFMF

FF

FF

FMFF

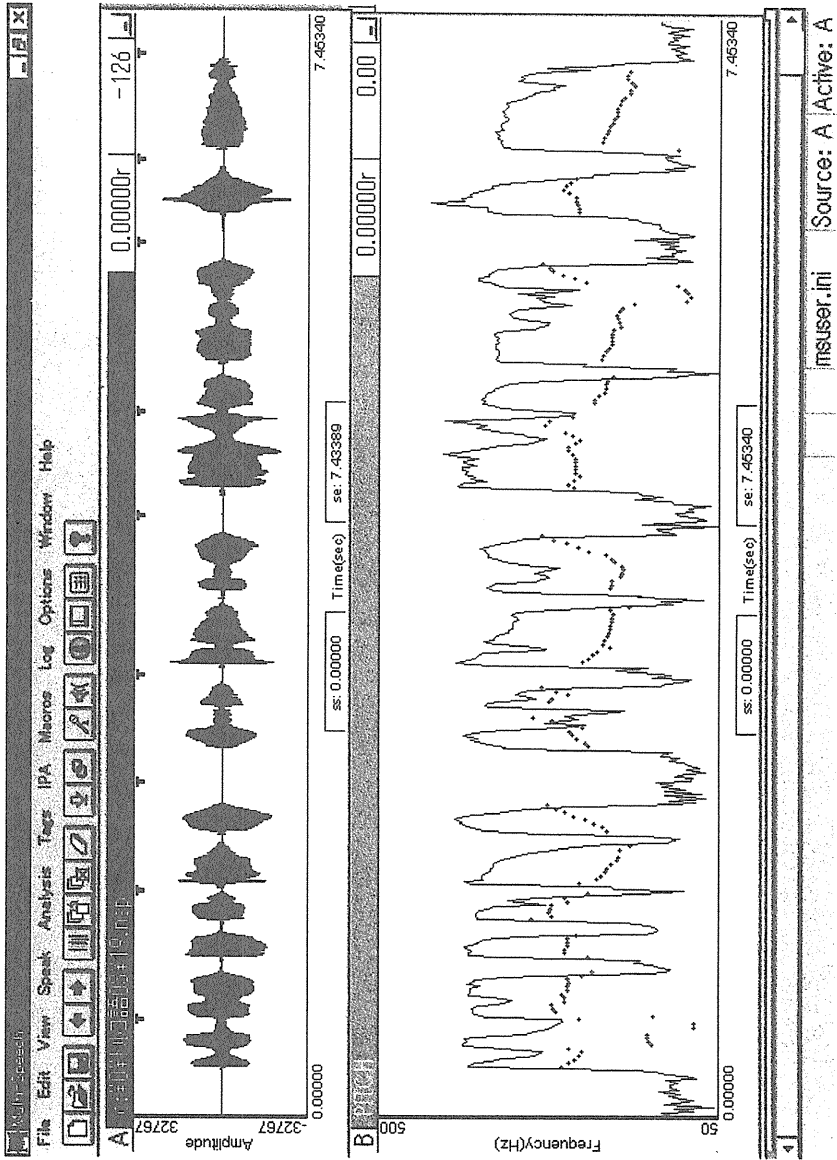
MMM

FMFF

FM

FFF





4.20 Hanım içerde,  
奥さん 中

Saçı dışarda  
彼女の髪 外

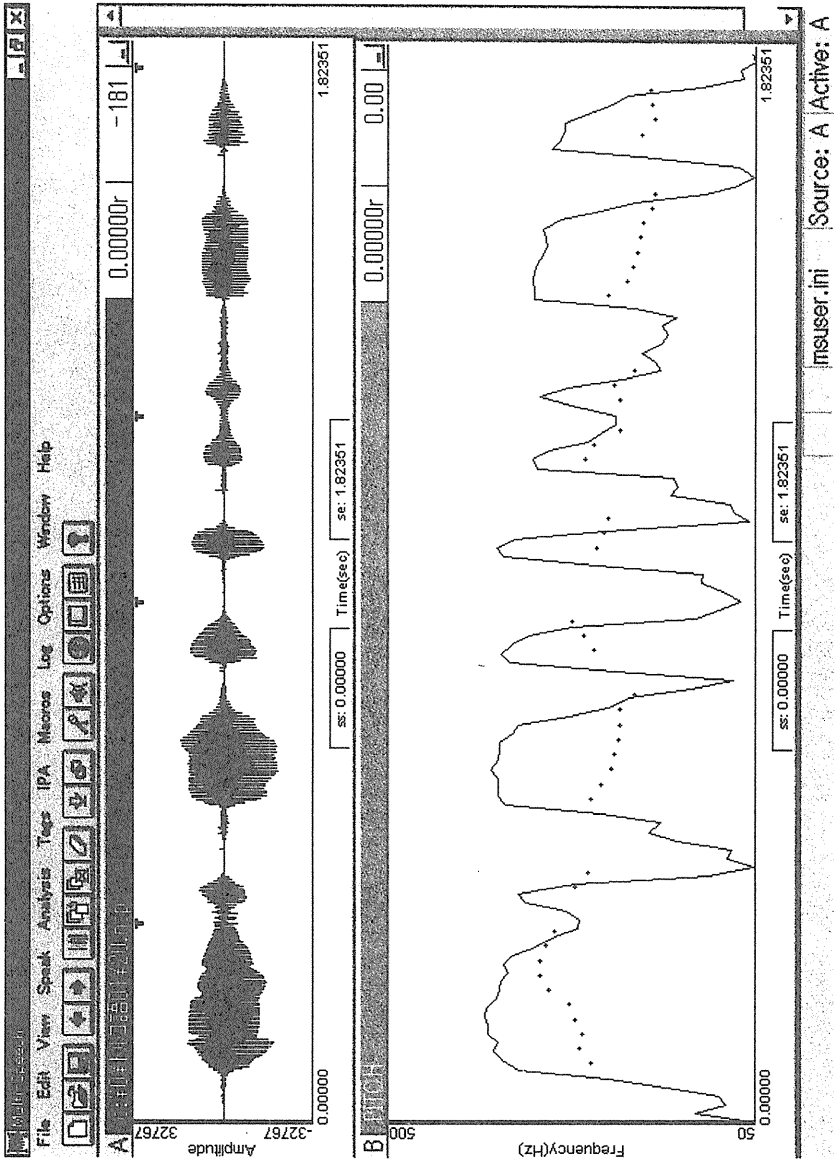
【答え：mısır トウモロコシ】

a í i e é

a í l a á

MM F F F

MM MMM



以上に示した分析結果について若干の説明を施しておく、まず、それぞれの配列は次の順になっている。

- (1) 原綴と逐語訳の併記
- (2) プロソディー分析
- (3) 母音音素の類別
- (4) 音響解析データ

これらのうち、(2)は最小のアクセント節単位ごとに母音音素を四角で囲み、特にアクセントの山が見られる部分には「´」の記号を指した。但し、例外的に第2アクセントが認められる場合には「`」の記号も指してある。

次に、(3)は母音調和の観点から、上記(2)の四角で囲んだ単位ごとの母音音素を、男性母音(Mと記号化)と女性母音(Fと記号化)に分類してある。なお、それぞれに分類される具体的な母音音素に関しては、すでに3.2に述べてあるのでくり返さない。

最後に、(4)には対応の音響データを、①原波形(上段)、②フィルター分析(下段)の2現象表示によって示す。但し、下段の図中line(実線)は物理的な強度を示す音圧を、またdot(点線)は物理的な高さを示す基本周波数を表示している。さらに、上段の原波形には上部にT字型のマーク(tag)をつけて、(2)におけるそれぞれの囲みに対応する部分を明らかにしてある。

具体的な例によってこのことを示せば、例えば4.1には6個のtagが置かれているが、最初のtagは原綴で表記すると《çarşıdan》に該当する部分を、また2番目のtagは《aldım》、3番目は《birtane》に…という具合に、それぞれが対応している。さらに、この画面は下段の画面と正確にリンクするよう調整されているので、定規などを用いてtagから垂線を下ろせばより一層プロソディー面における音響特性が見やすくなる。なお、本来ならばtagをふってある位置にすべてカーソルを立てておきたいところだが、このソフトでは一度に2本以上のカーソルが立てられないためこのような表示をとっている。

以上が本稿における基幹的な部分だが、ここからやや応用発展させた、いわば副次的な分析結果も得られているので、ここではその結果だけを次に図21～49として示す。これらの音響データは、2現象表示を採用している点では先に掲げたものと同様である。但し、上段の原波形に対して下段はformant historyをバンド幅で描かせている点が異なる。

なお、本研究に用いた音響解析用ソフト Multi Speech では、formant history を「口腔における伝達関数の時間変化」と定義しており、時々刻々と変動を遂げて行くフォルマント動態を、ある程度の幅を持たせた帯域として表示している。また、縦方向に伸びている棒状パタンのうち 1 点のみ dot が見える部分は、ソフト上において演算されたフォルマントのコアである。

この図が意味するところは、母音と子音の時系列上における変化を、周波数と音圧の両面から示していることになるが、本稿では特に基幹部分におけるトルコ語の分析の周辺に見える事象の 1 つとして、文音調までは大きくないけれども単語音調よりは大きい、プロソディー面におけるまとまりを示す「句音調」の析出に利用している。

すなわち、具体的に述べれば、図中に「×」印で示してある部分がそれぞれの句音調における頂点を示しており、1 句音調内では必ず 1 カ所にこの「×」印で示される句音調の頂点が存在することになる。但し、先に行なった音響解析が専ら音声の物理的な強さと基本周波数の高さであったのに対し、ここでは声道における共振周波数のピークを示すフォルマント動態が解析されている点が異なるので、結果は必ずしも一致しない。また、次節で述べる「文節」との接点も、この formant history で捉えたデータの方が明瞭に捉えやすい。

最後に、図21～49と資料番号との対応関係を示せば次のようになる。

図21, 22⇒4.1	図23⇒4.2	図24⇒4.3	図25, 26⇒4.4
図27⇒4.5	図28, 29⇒4.6	図30⇒4.7	図31⇒4.8
図32, 33⇒4.9	図34～36⇒4.10	図37⇒4.11	図38, 39⇒4.12
図40⇒4.13	図41⇒4.14	図42⇒4.15	図43, 44⇒4.16
図45⇒4.17	図46⇒4.18	図47, 48⇒4.19	図49⇒4.20

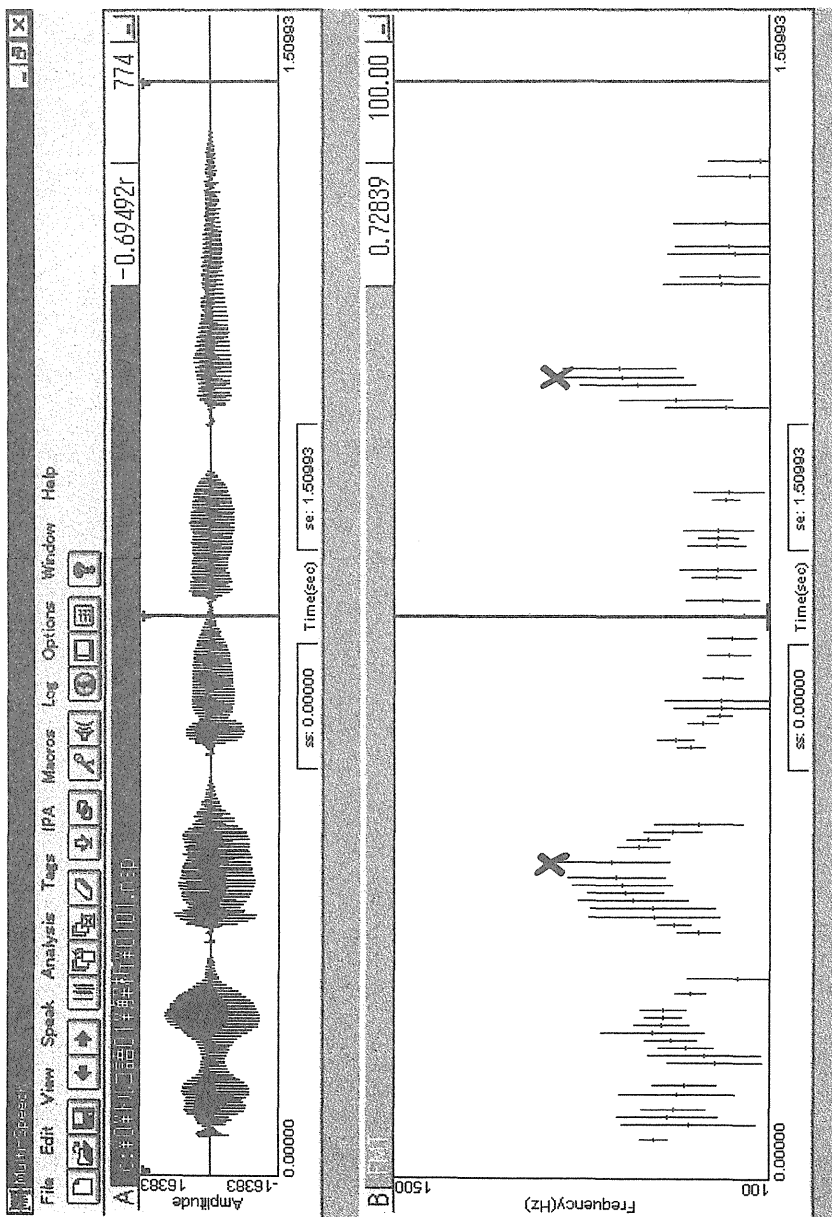
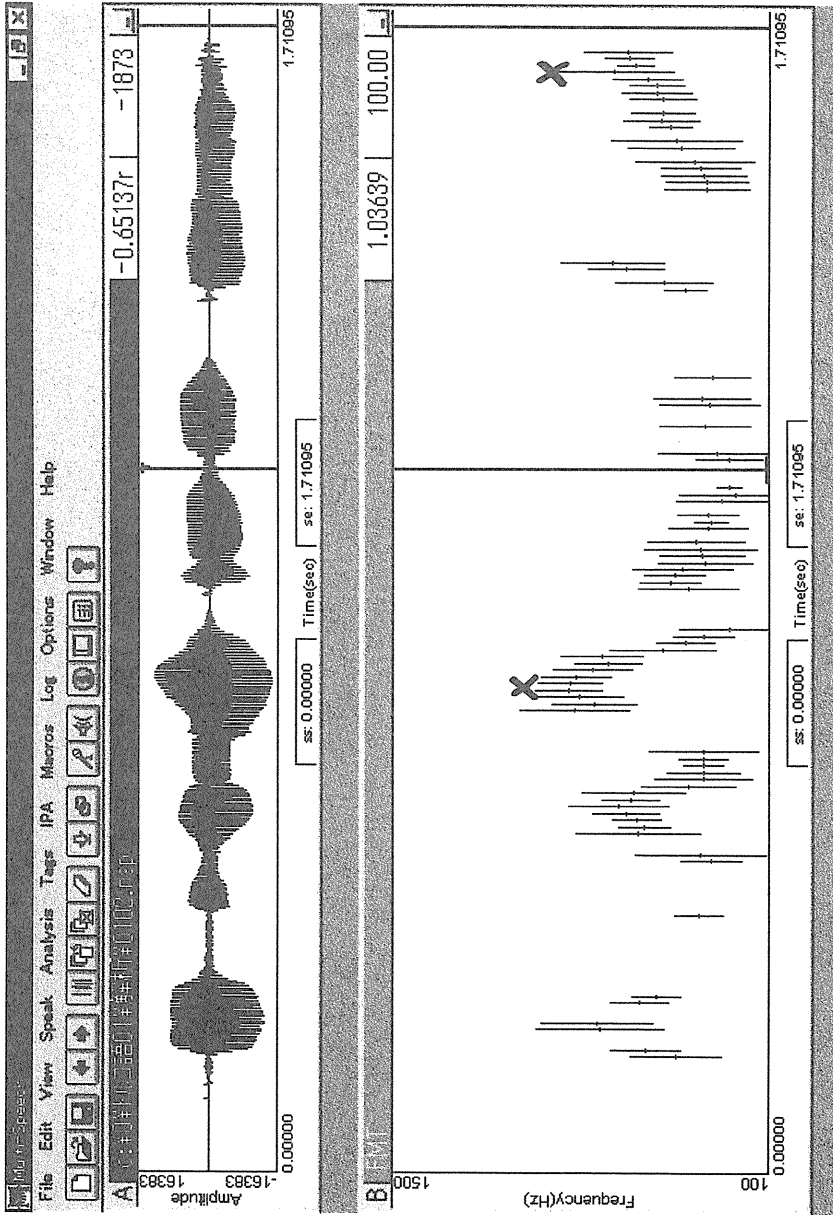


図21



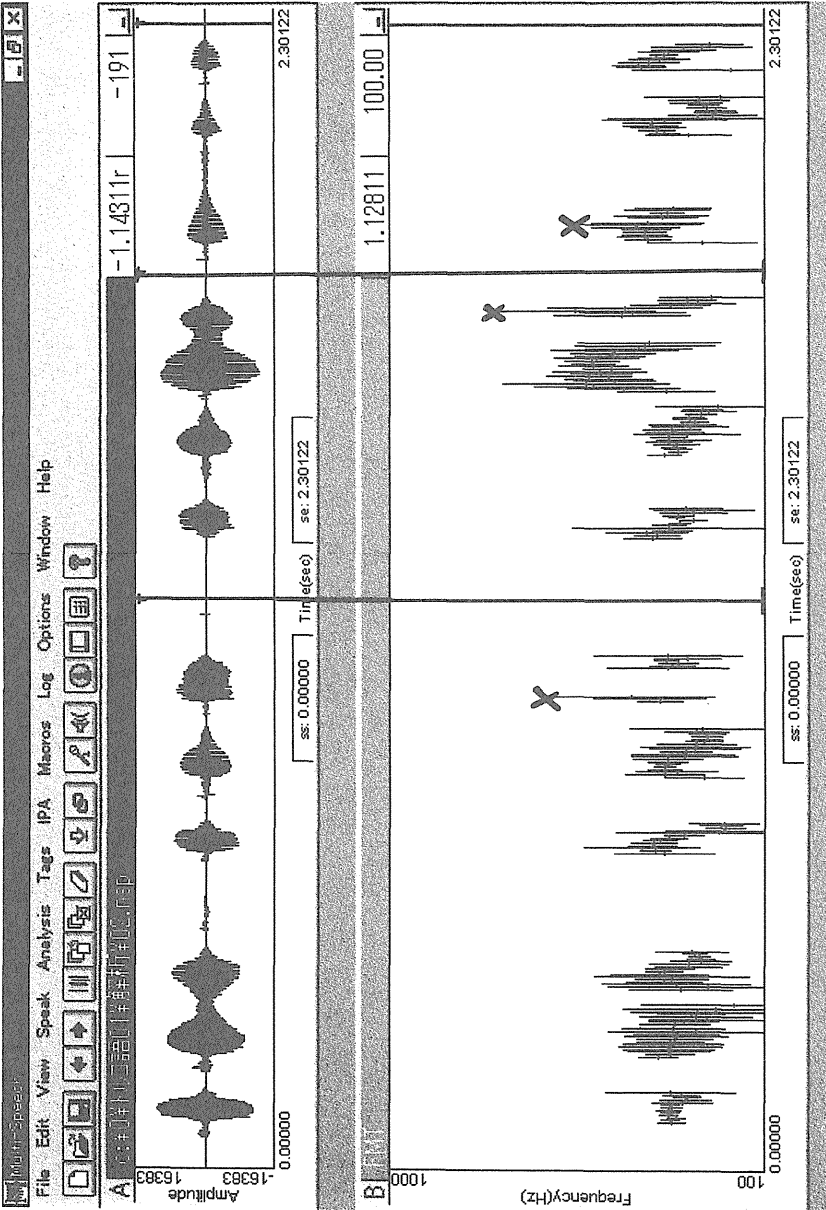


図23



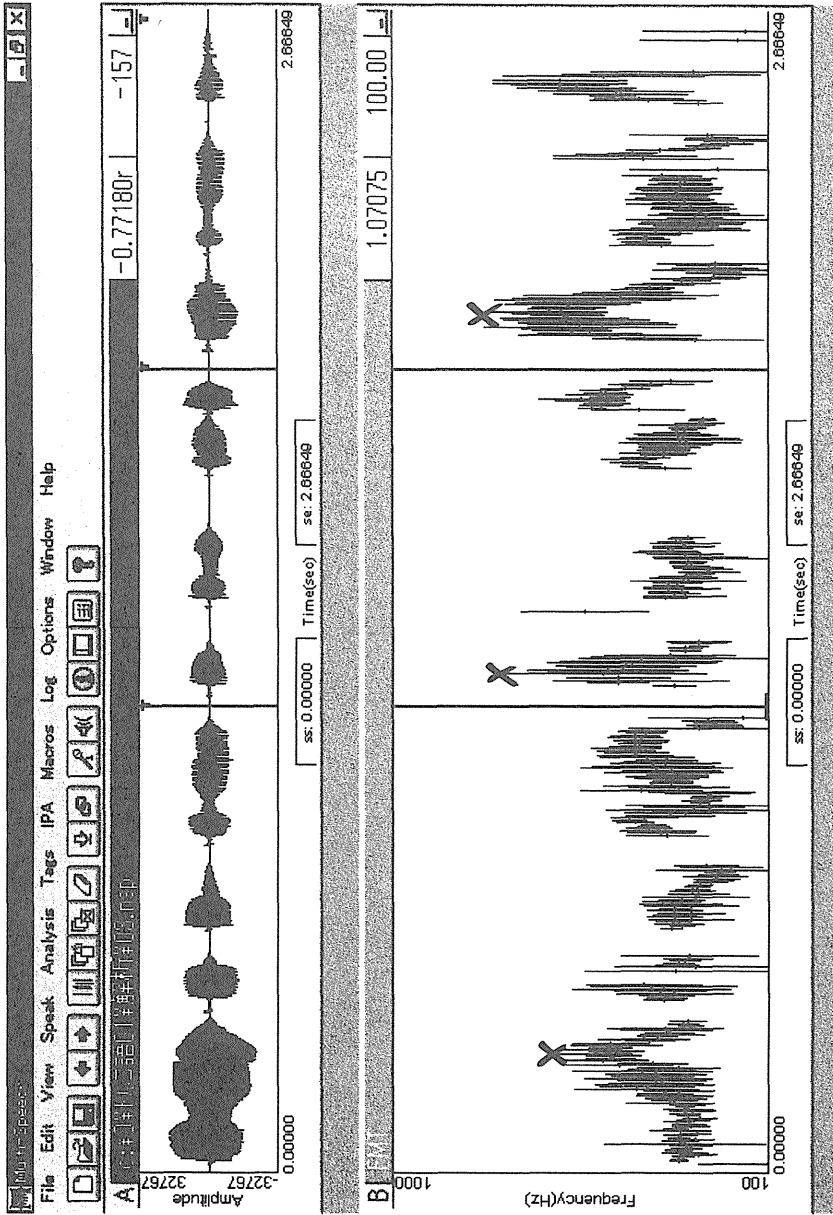


図24

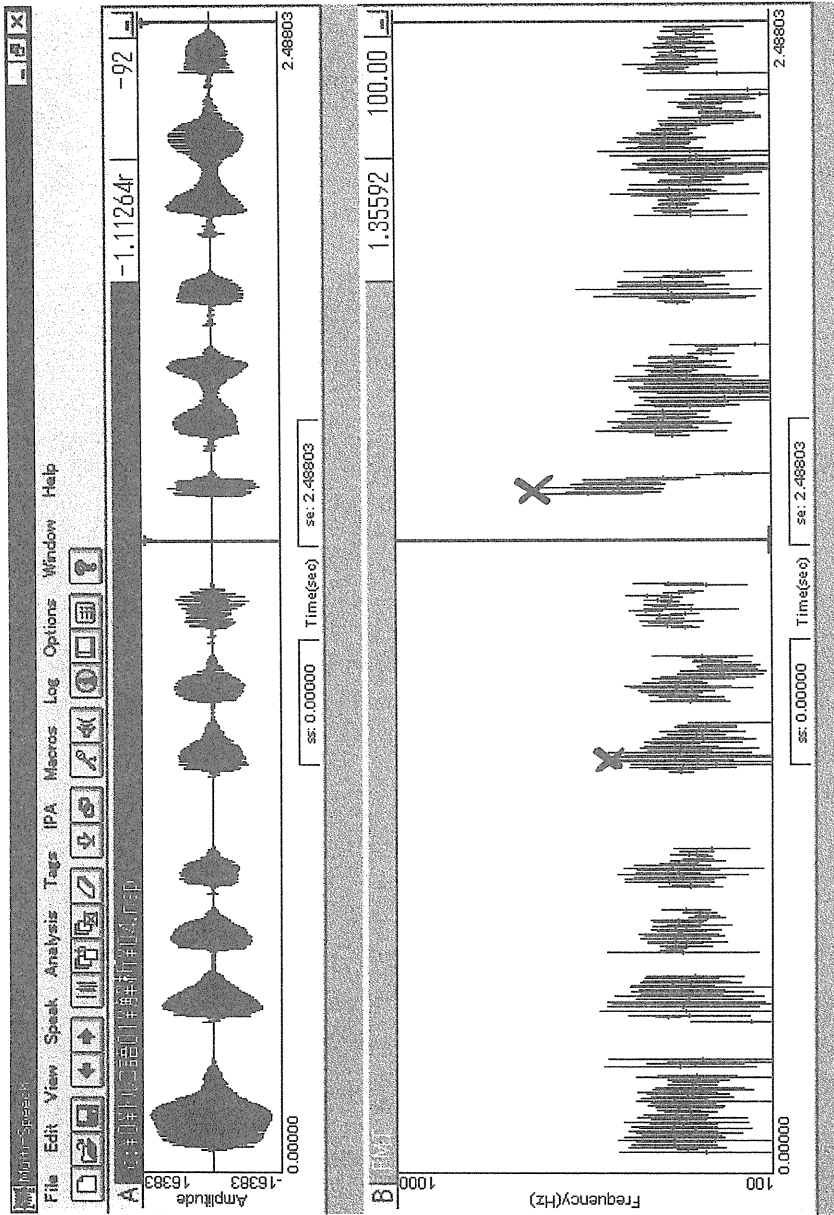
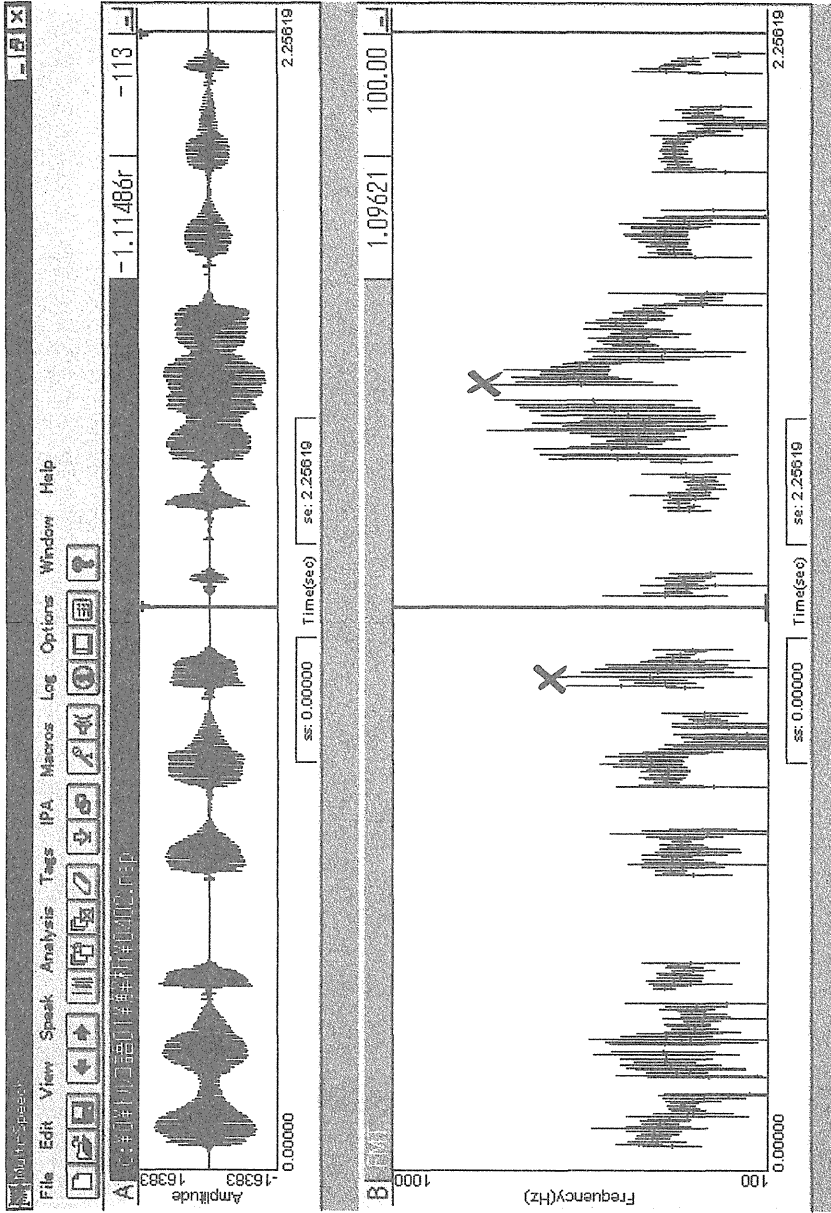
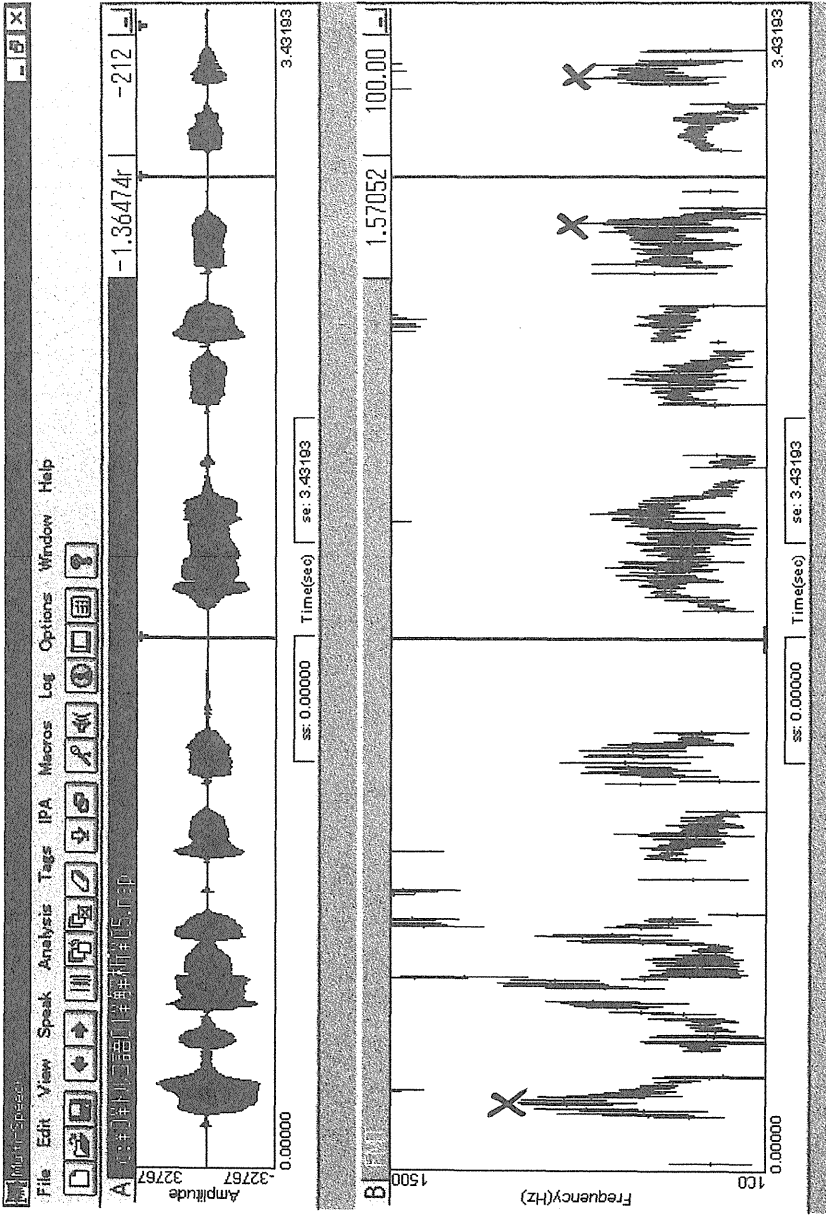


図25





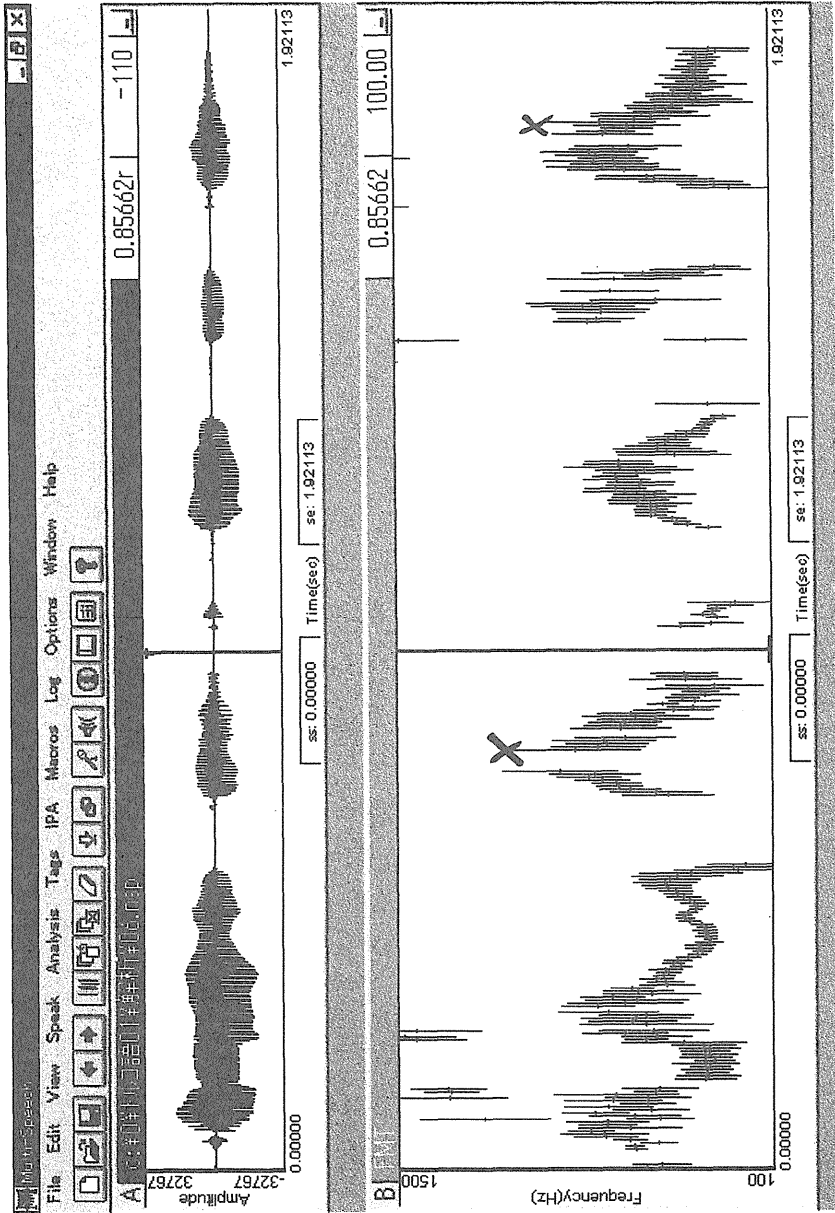


図28

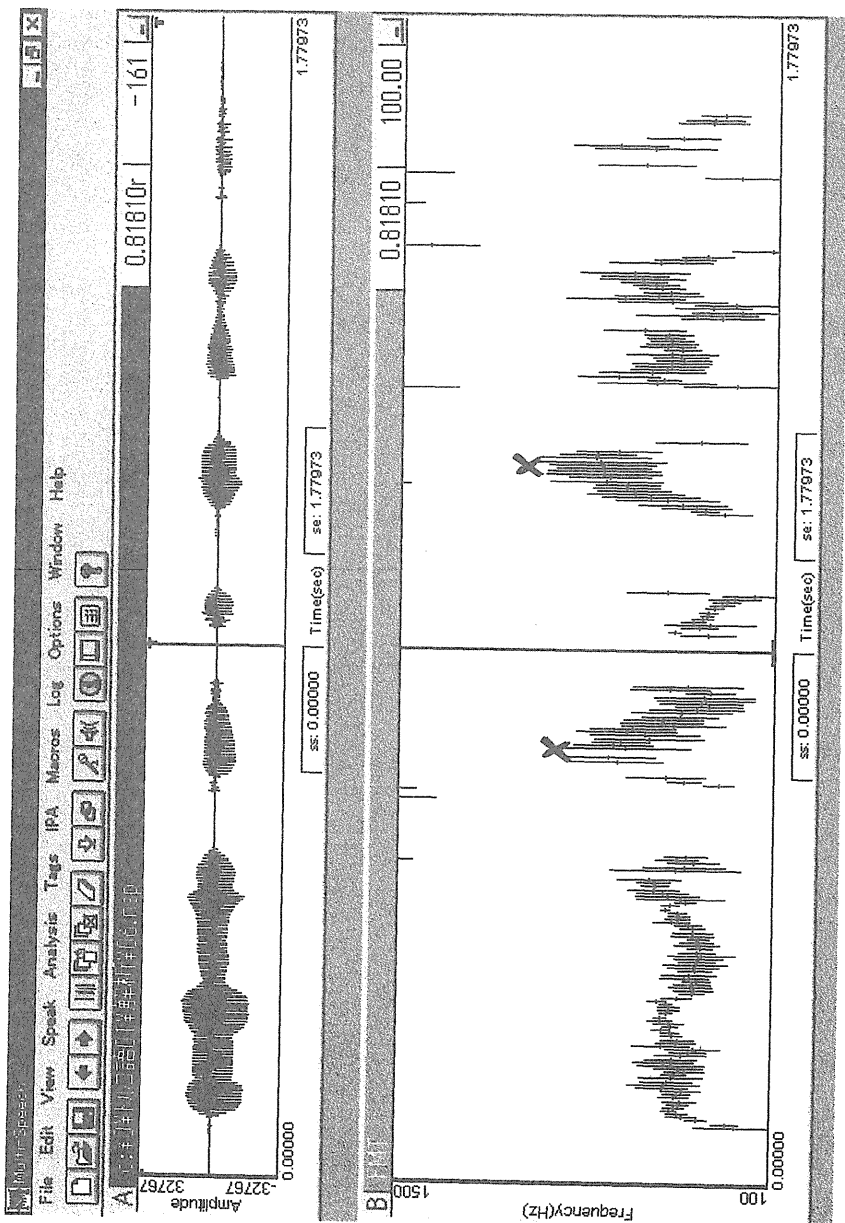


図29

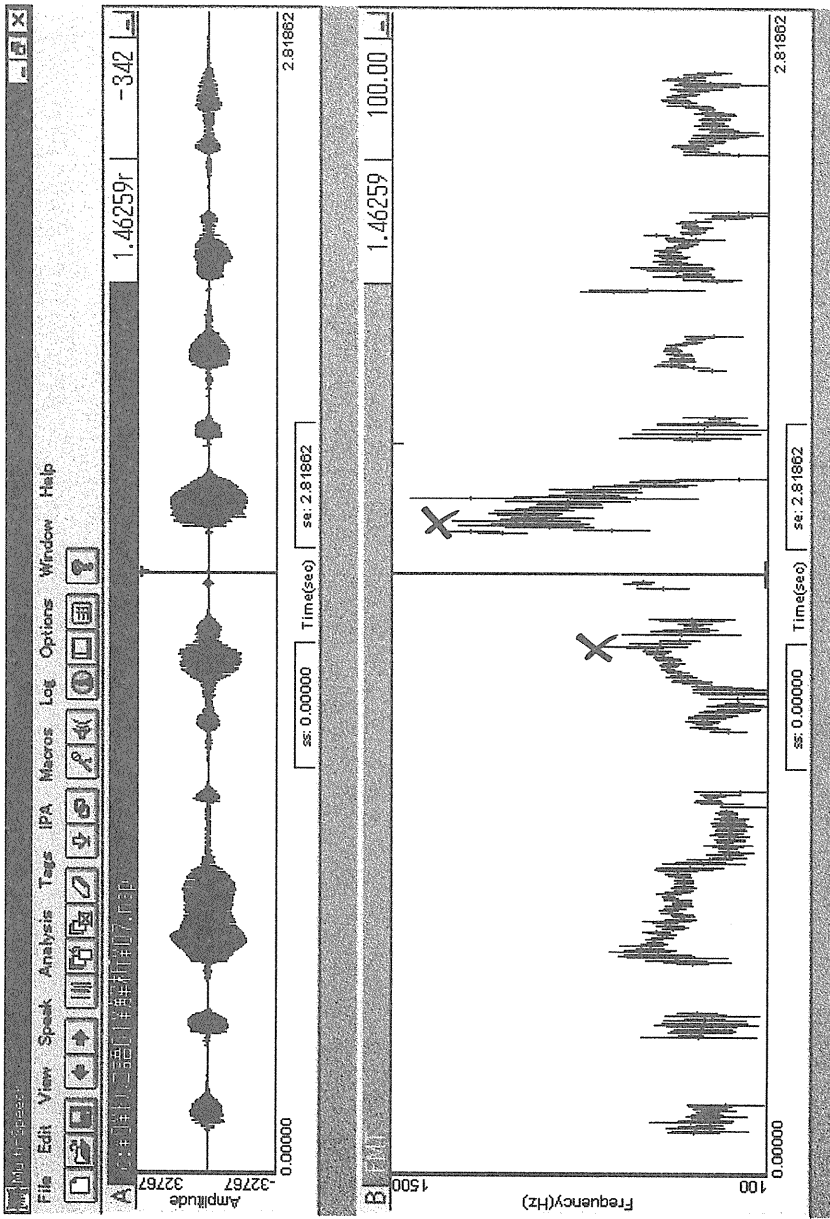


図30

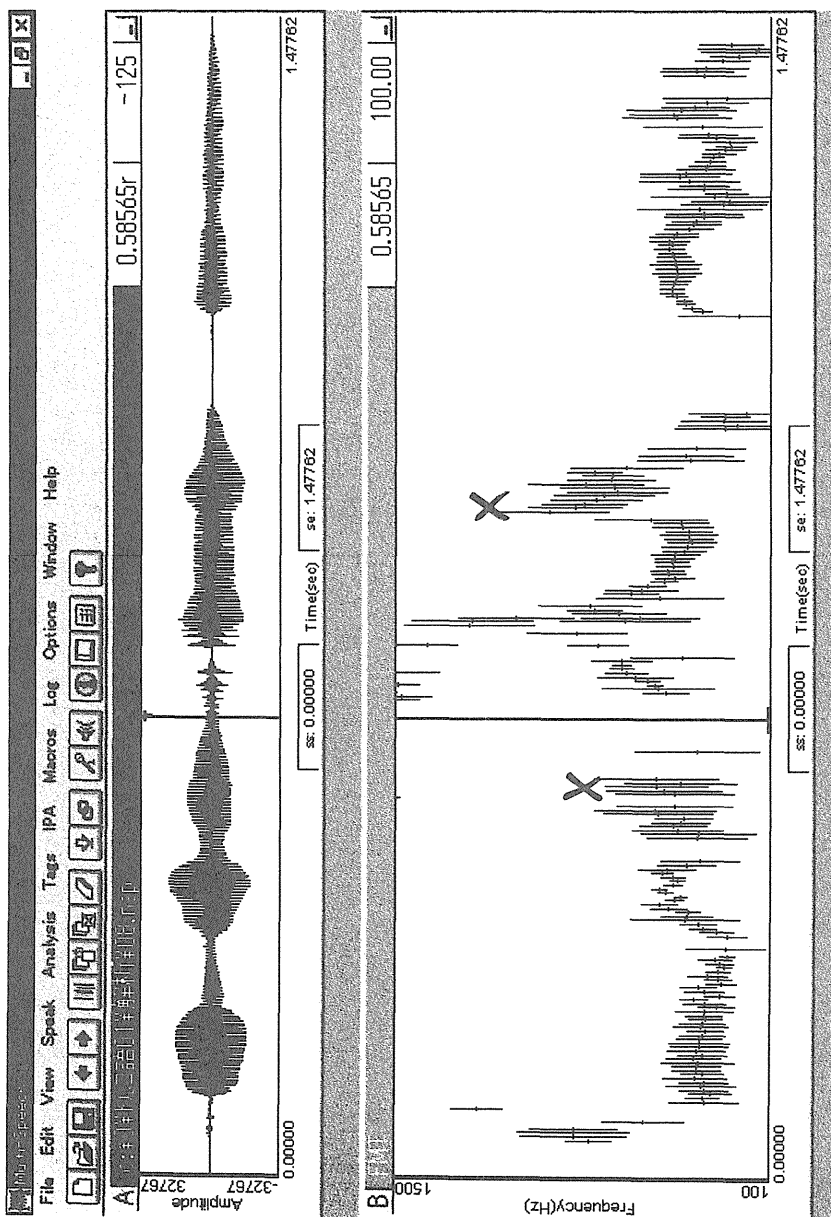
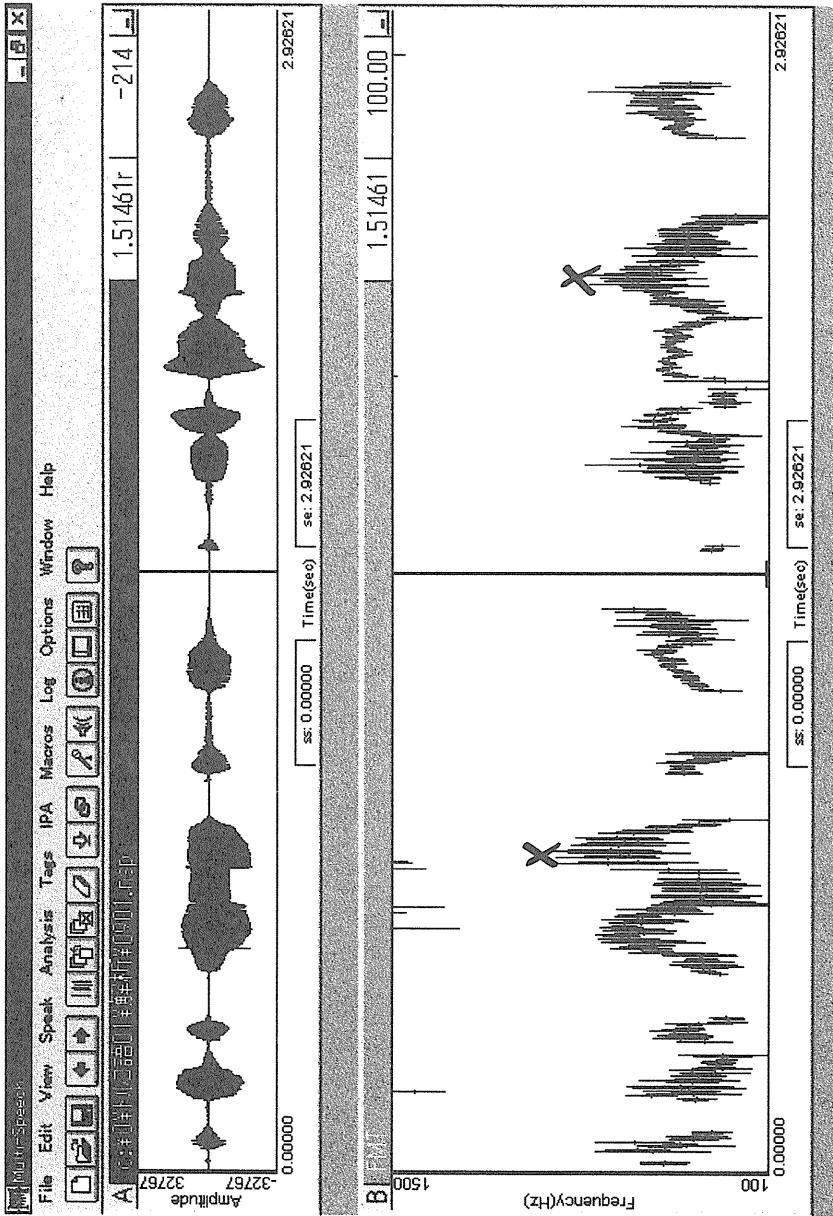
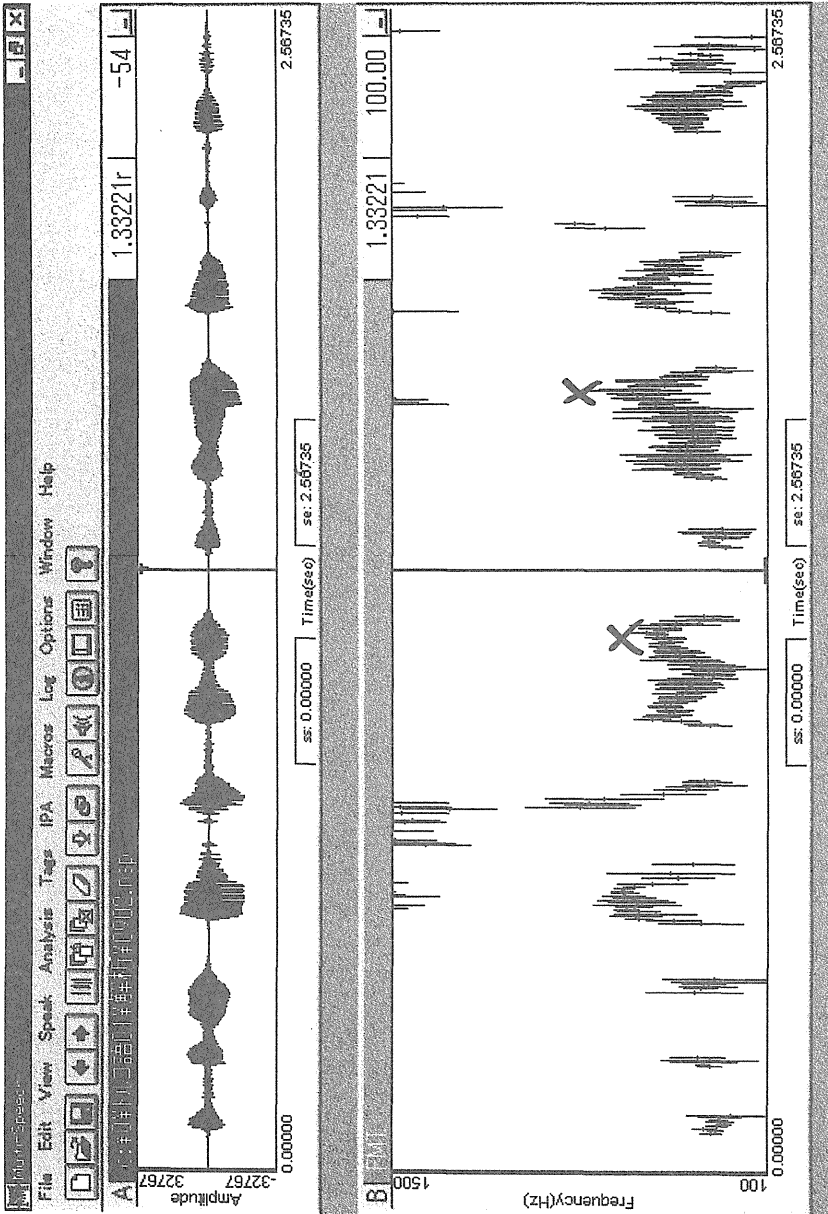


図31







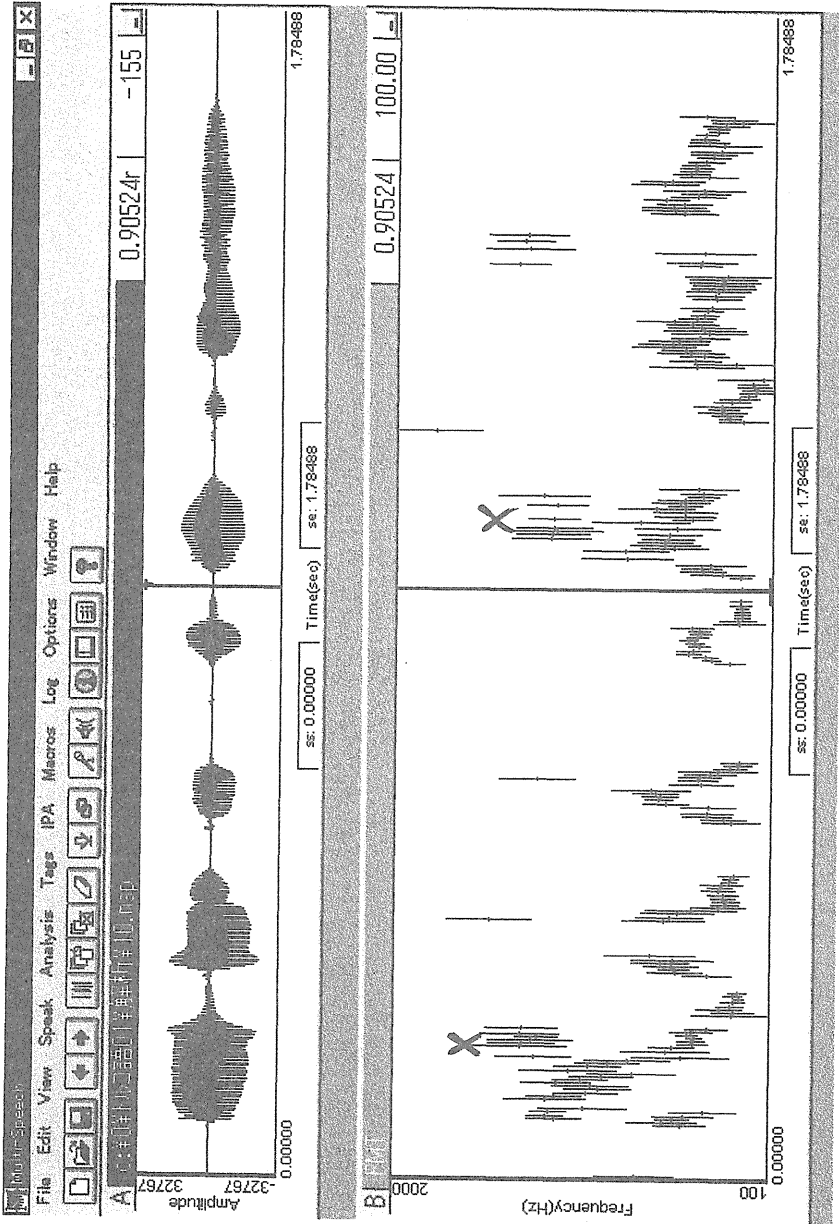
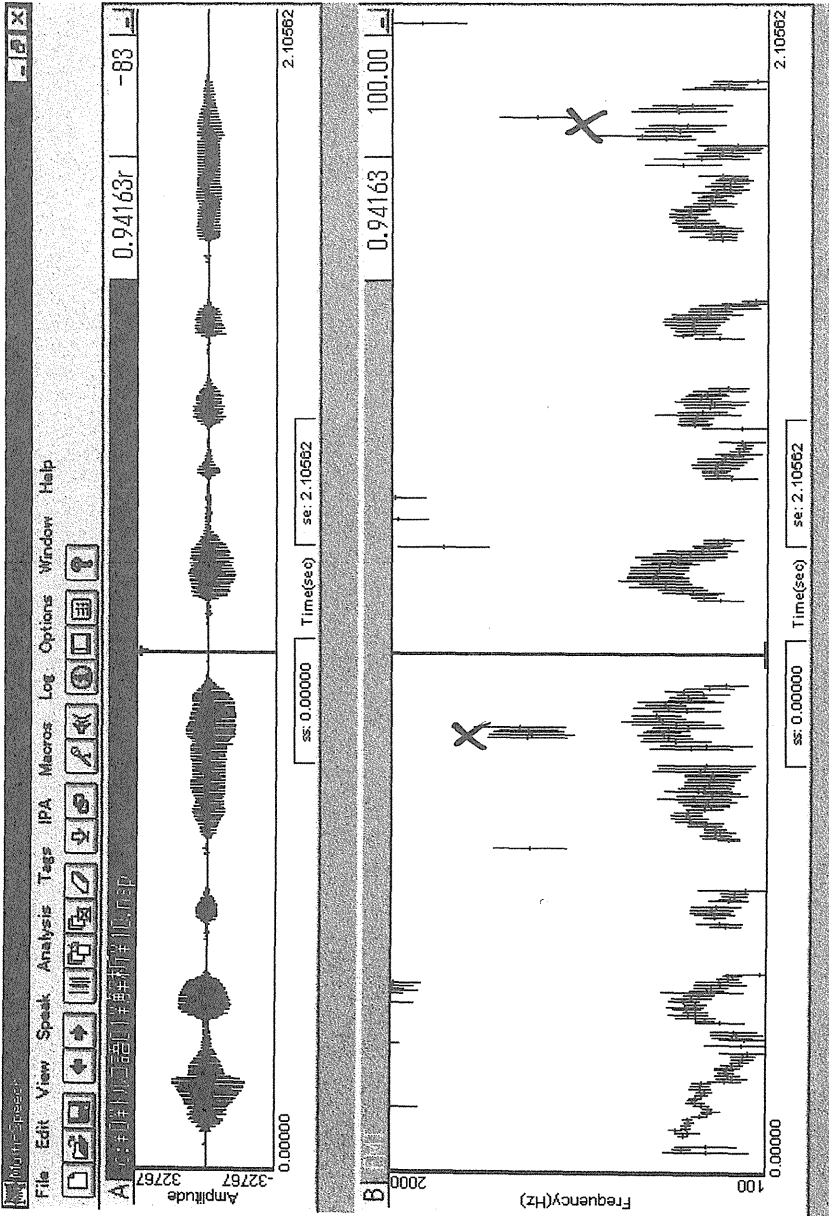


図134



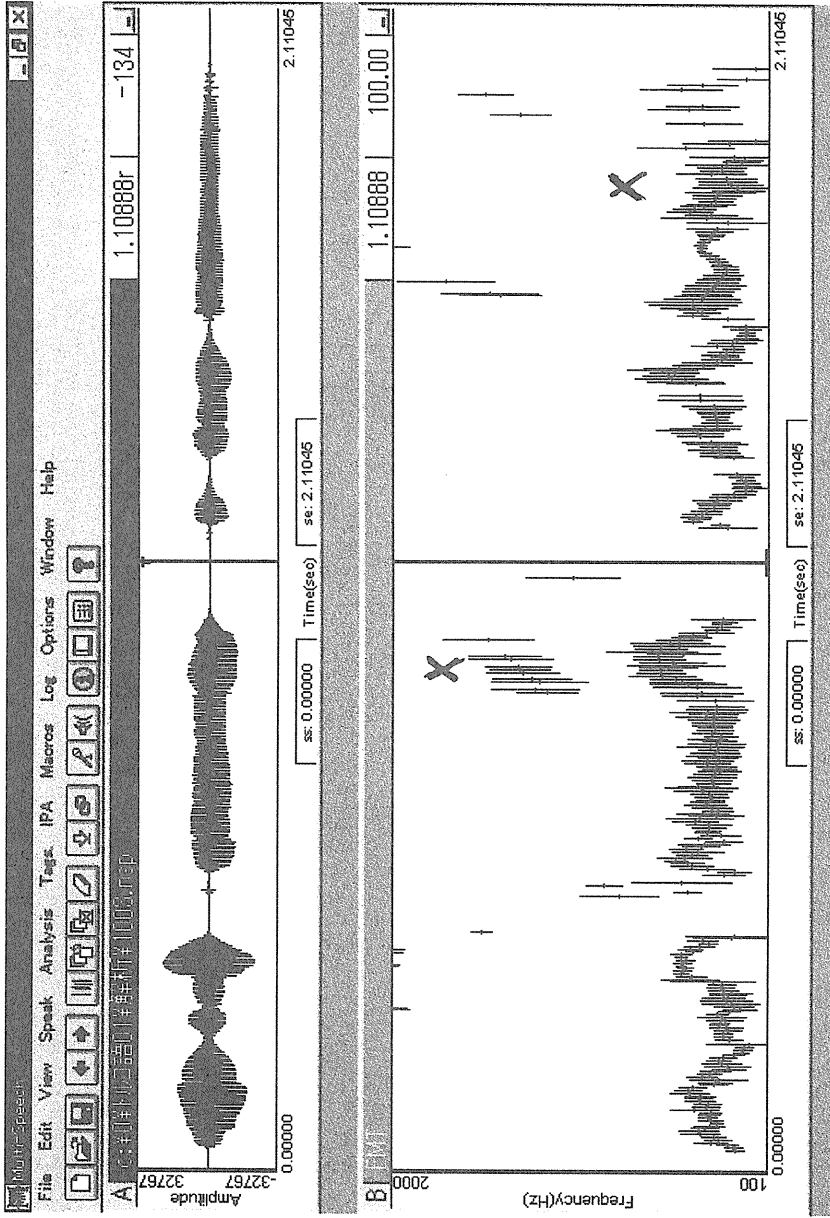
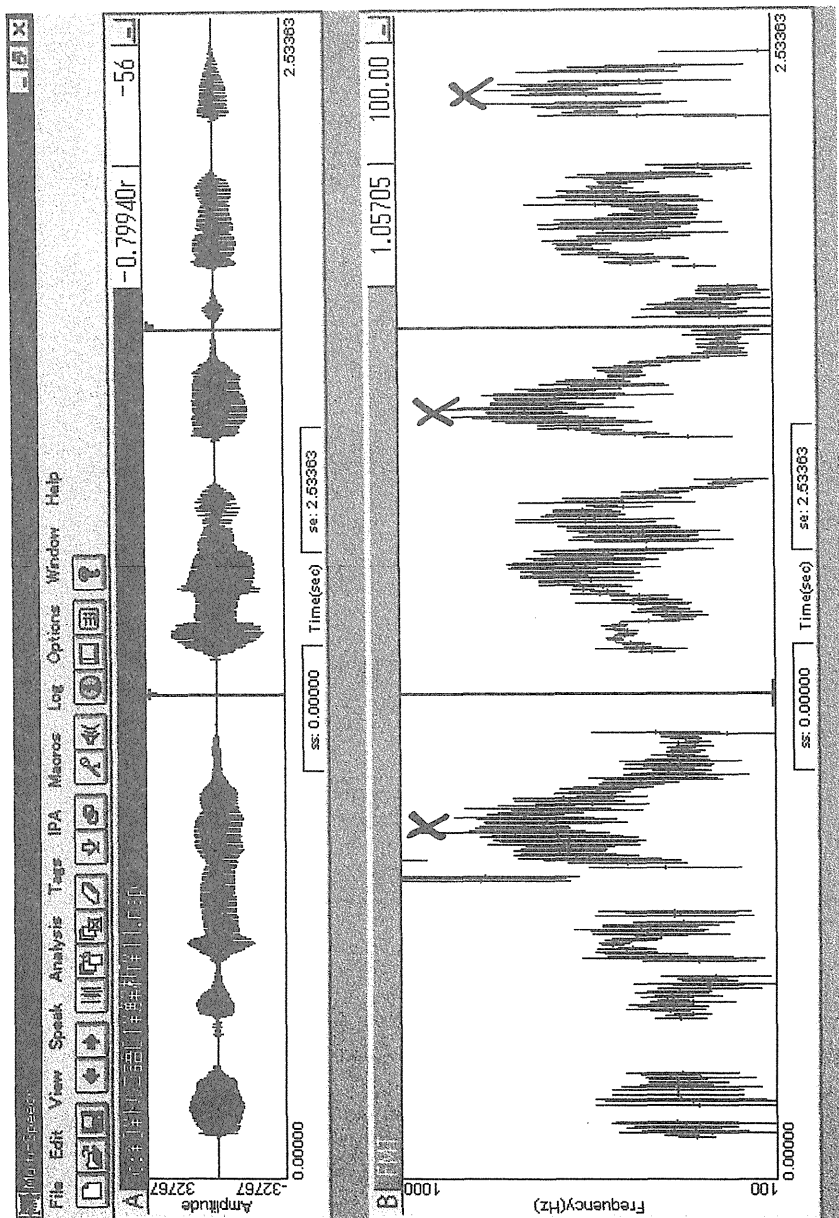


図36



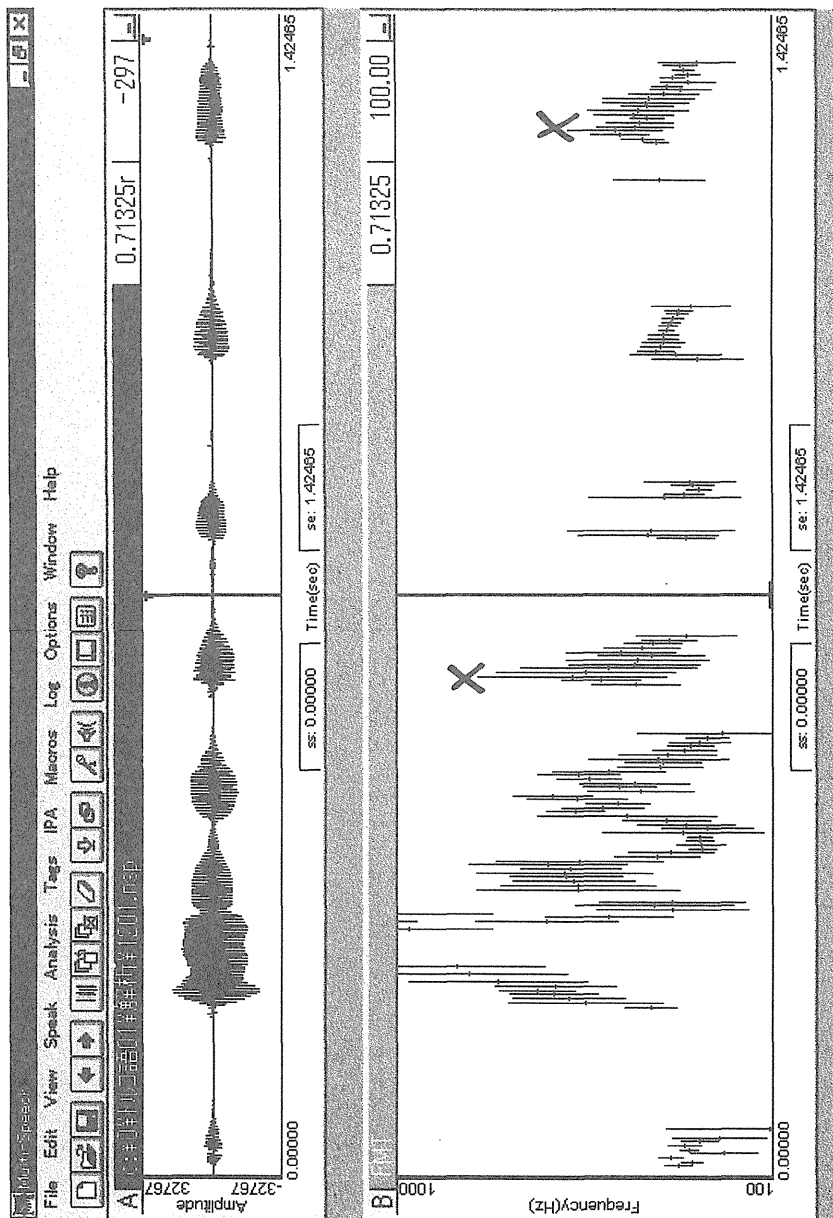
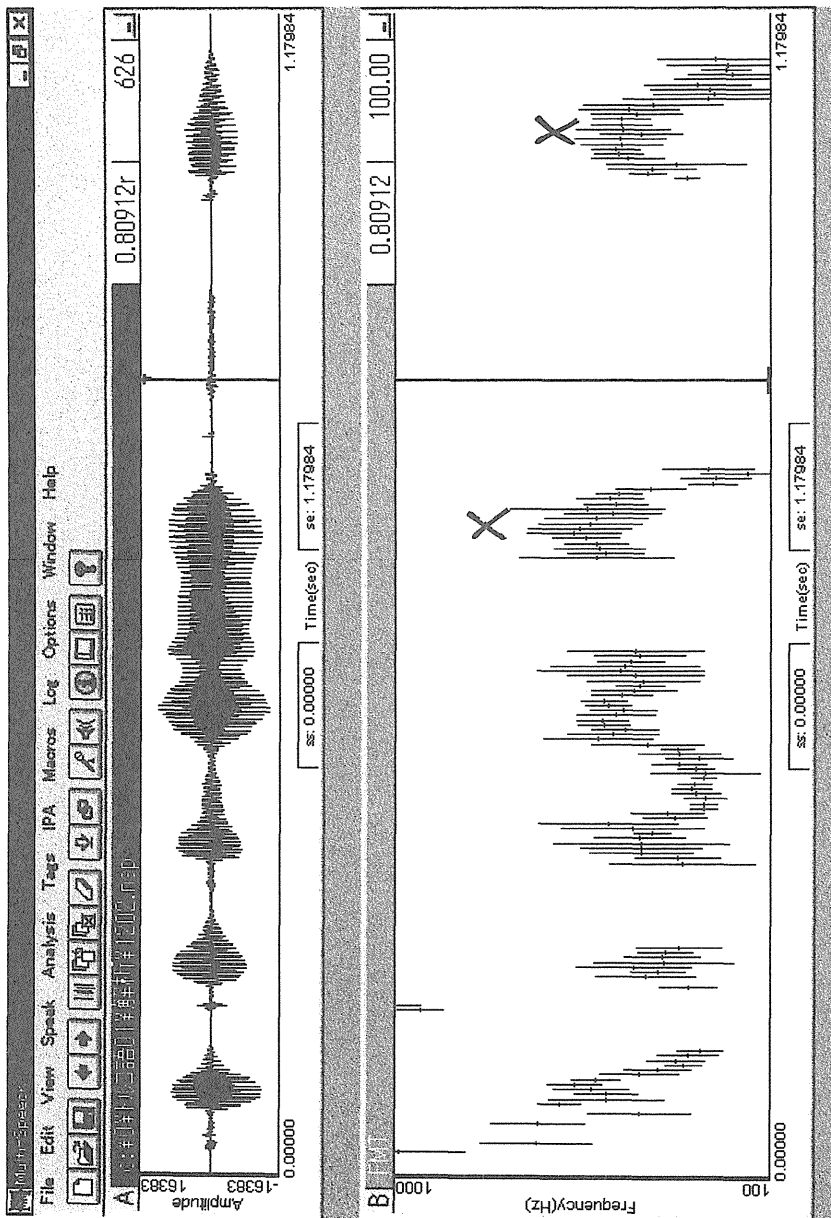


図38





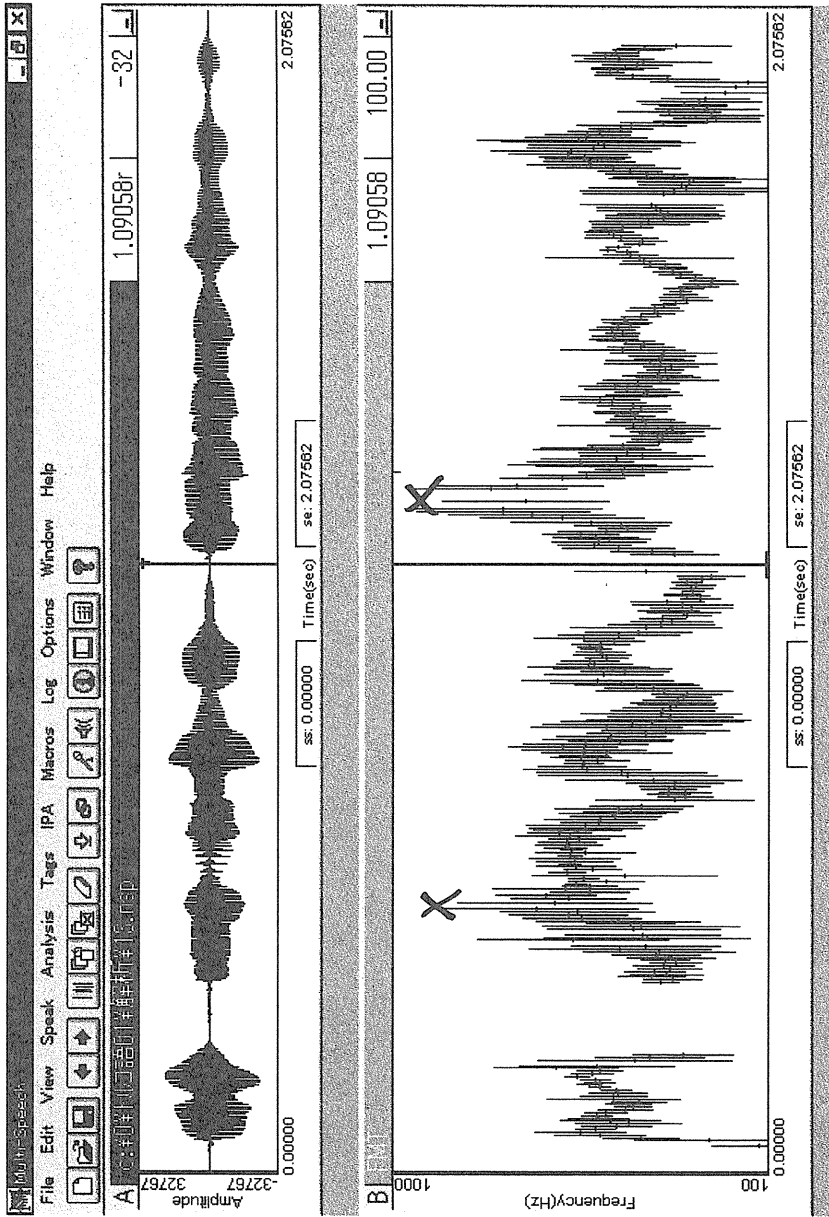


図40

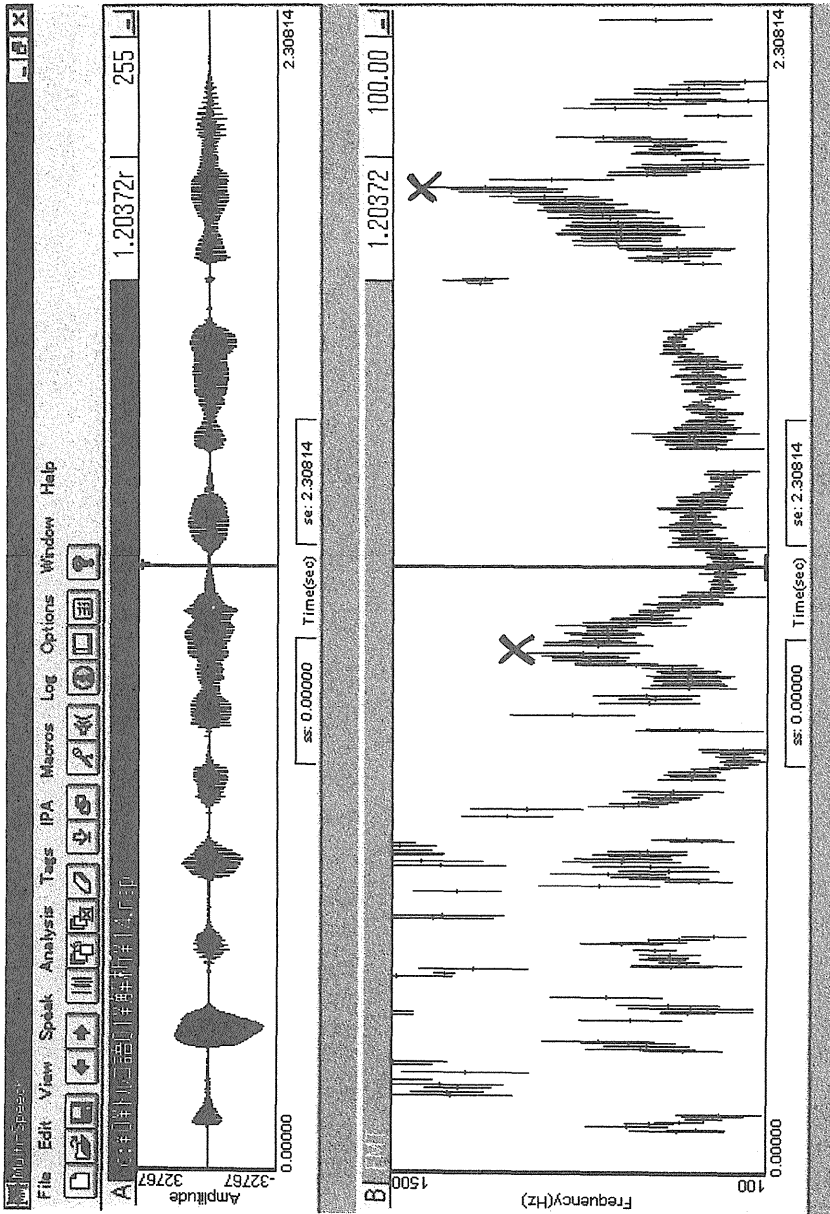


図41

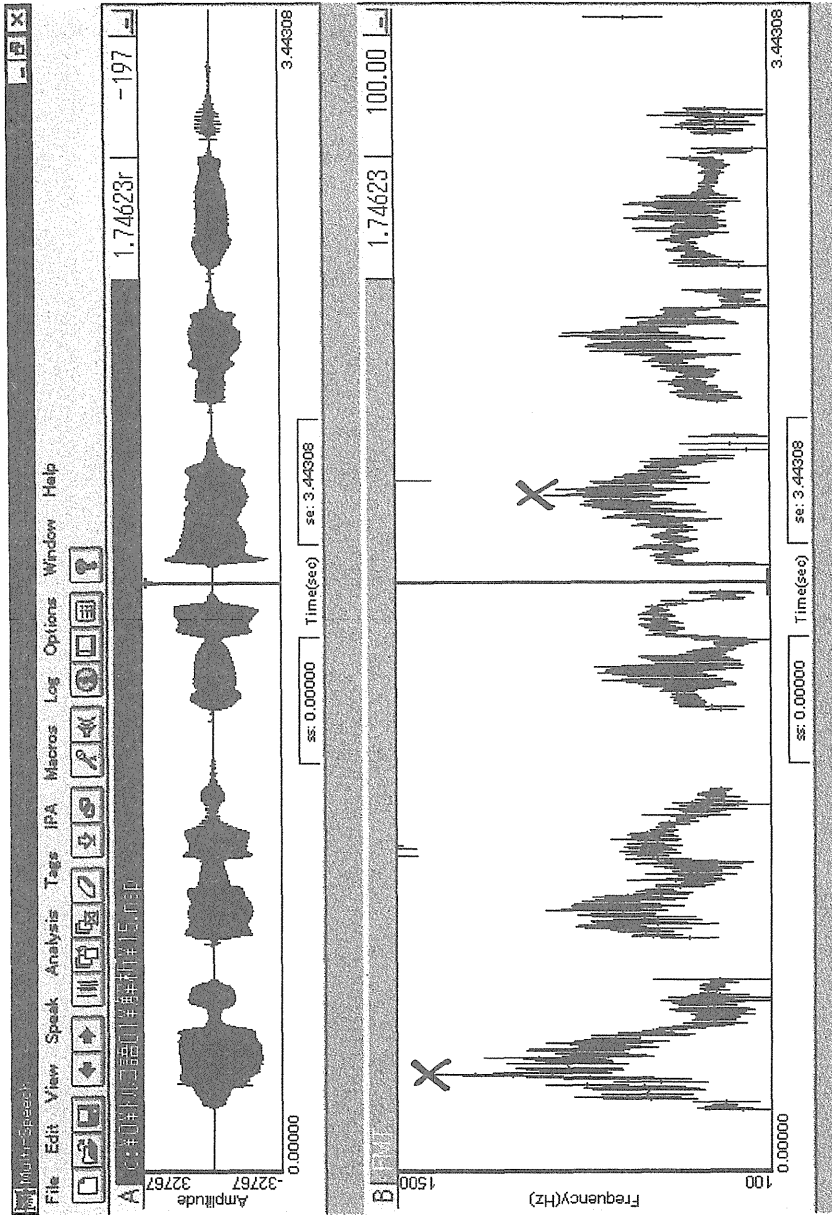


図42

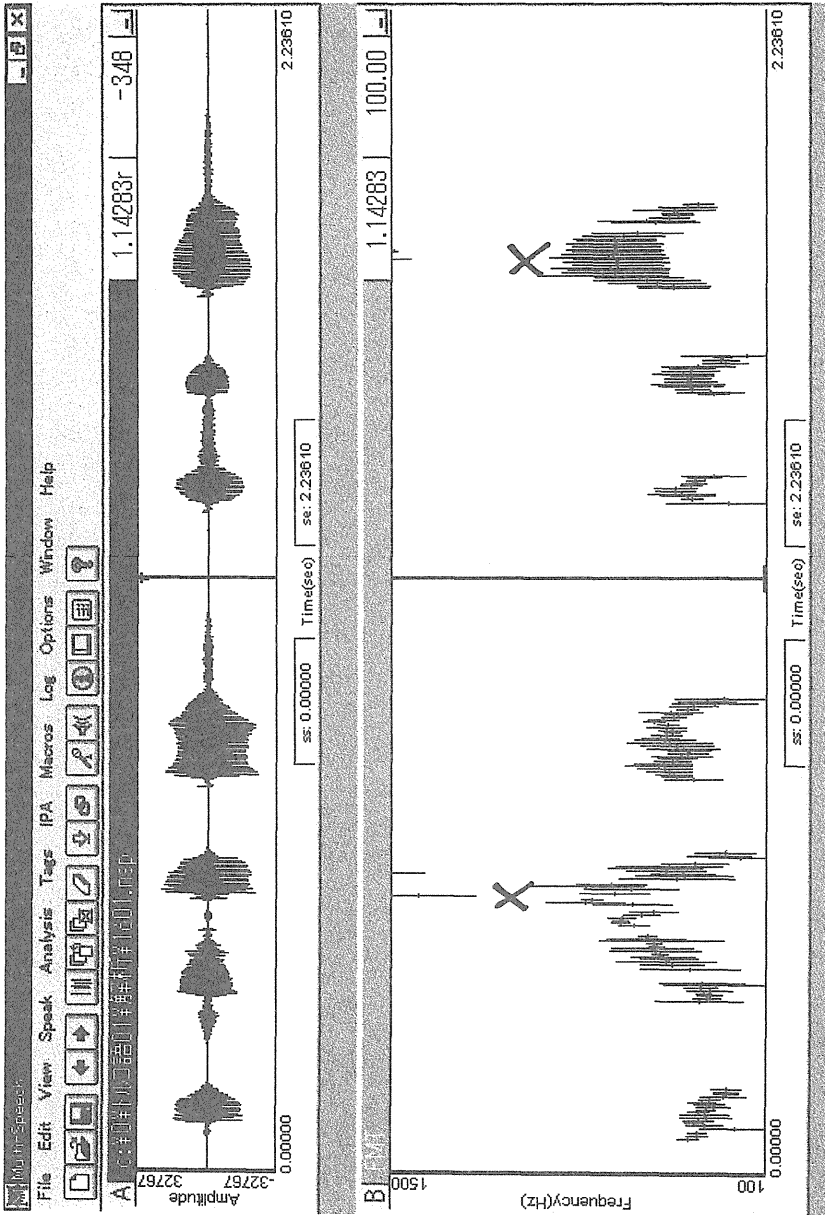


図43

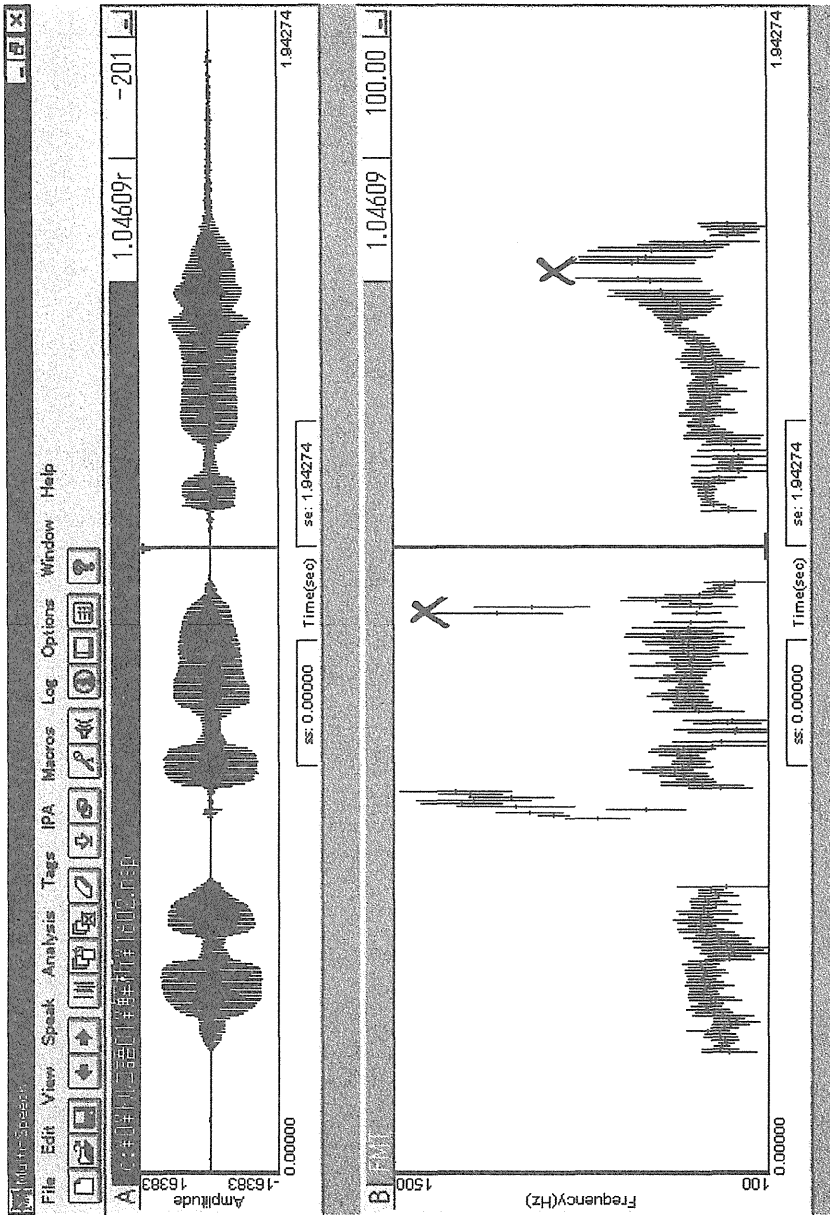
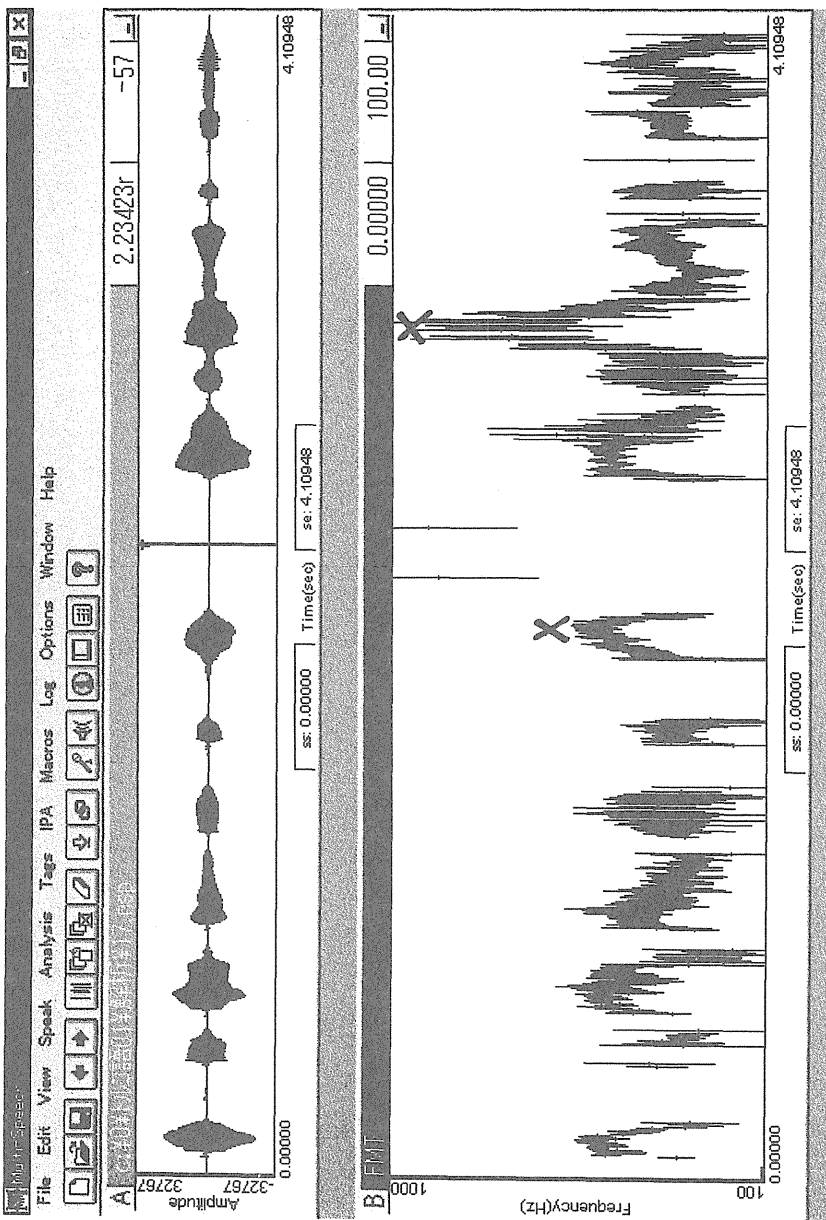


図 44



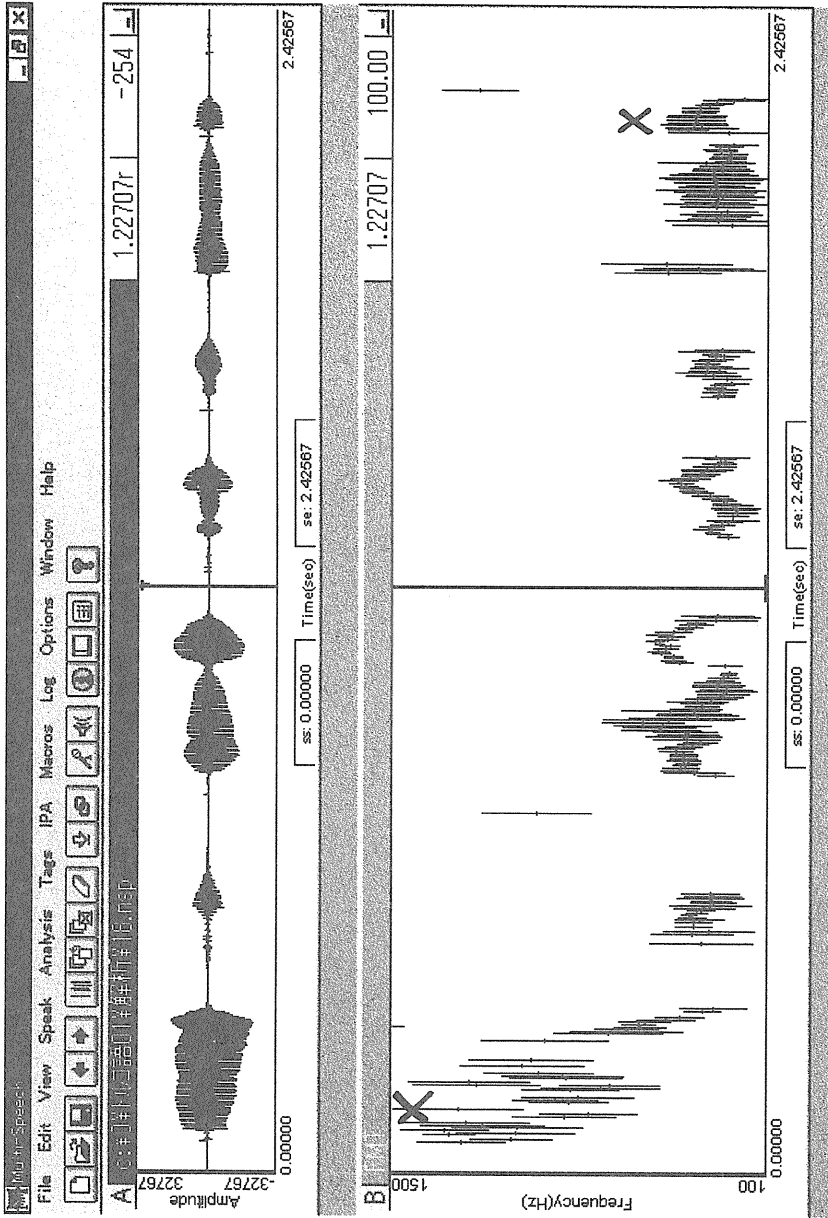
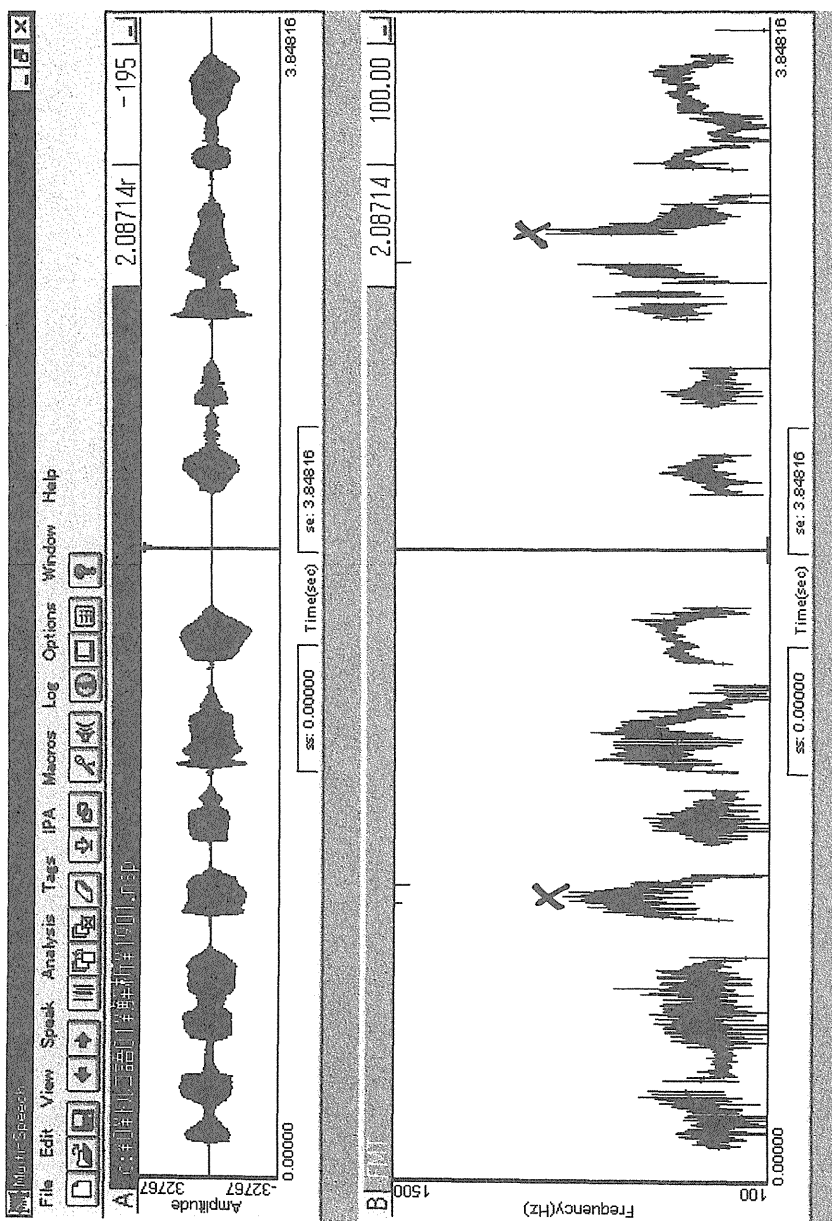


図46





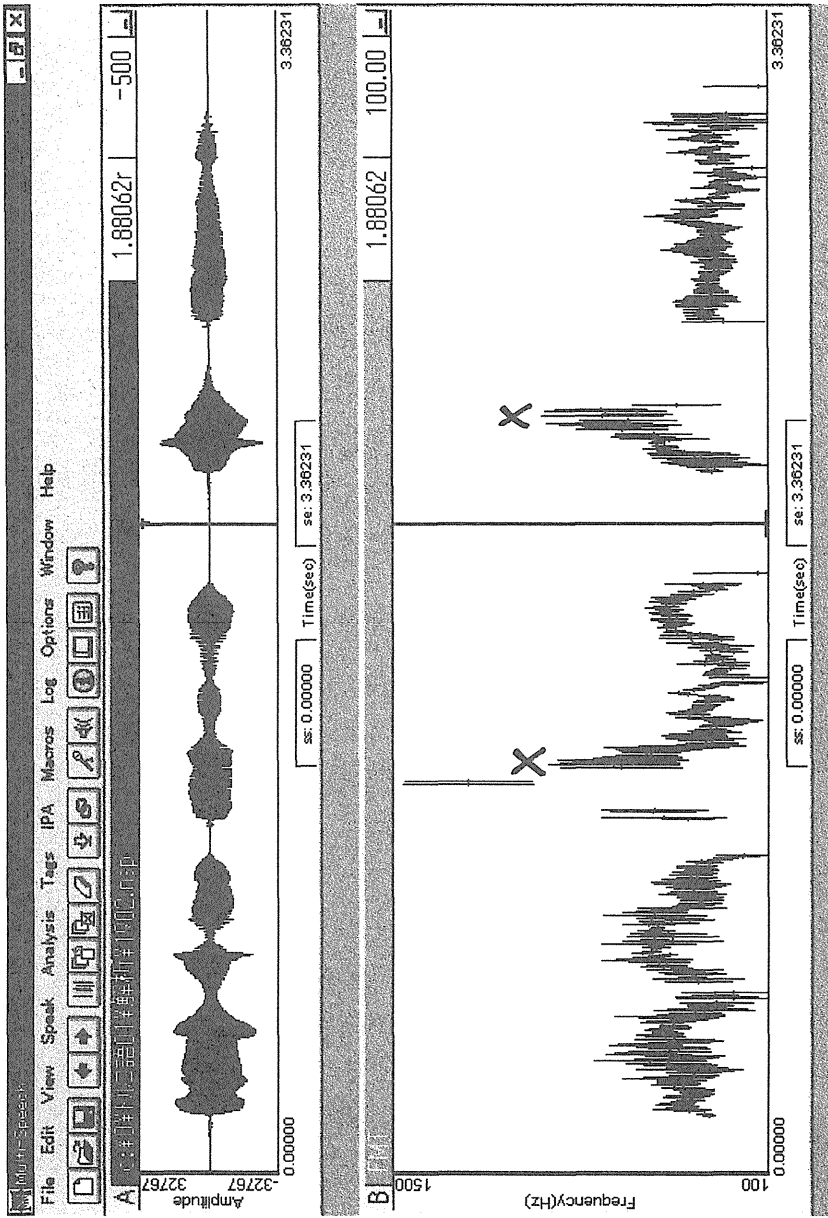


図48

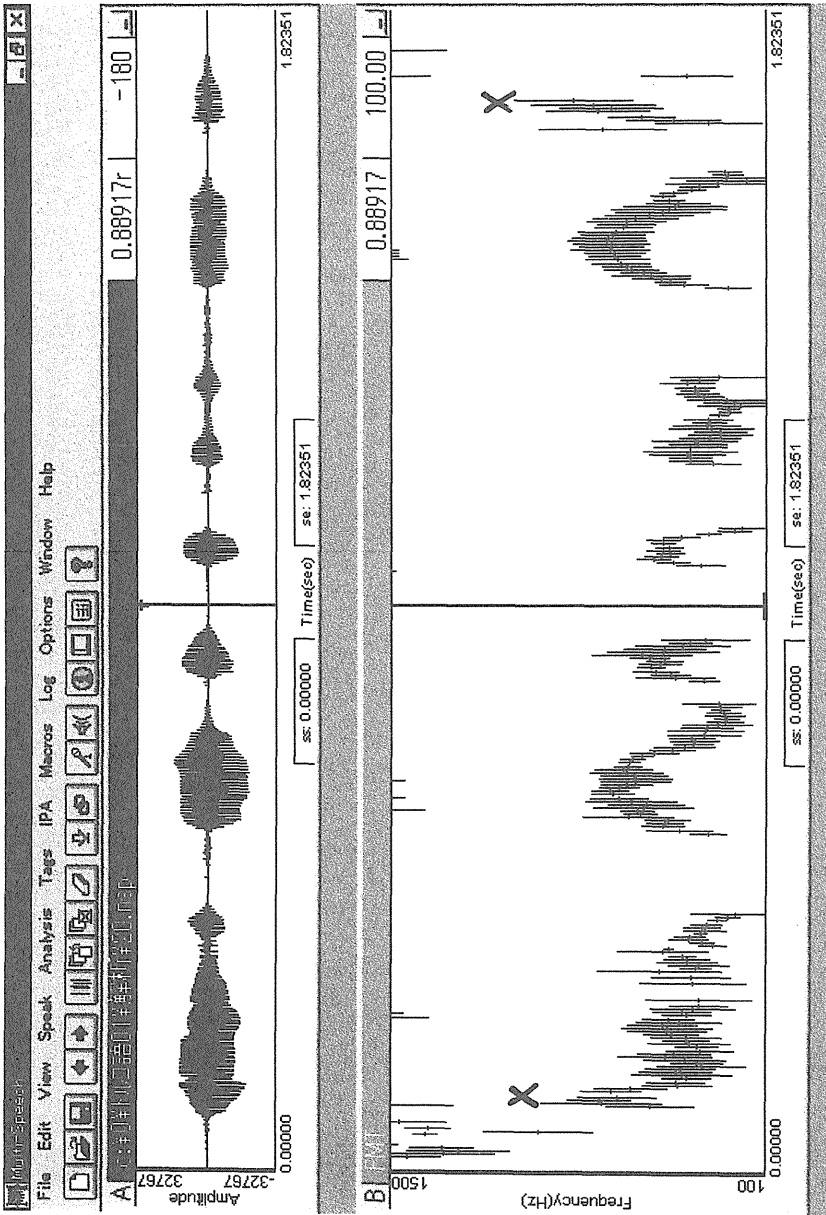


図49

本来ならば、以上に示した図21～49に対応する部分の詳細をIPAによってデータの中に書き込むべきところだが、今回はしめきり時間の関係で省略せざるを得ない。そこで、便宜的にそれぞれの図に対応する部分の概略を次に正書法で示しておく。なお、∥の記号は主として formant history を手がかりに音響データ上から読み取られた1区切りを示すもので、後述する「韻律節」に対応する。また、「左」「中」「右」などは、それぞれ図中に見えるパーカーソルで仕切られた1まとまりを示す。

## 図21

左 Çarşıdan aldım ∥  
右 bir tane ∥

## 図22

左 Eve geldim ∥  
右 bin tane ∥

## 図23

左 Küçük fıçıcık ∥  
中 içi dolu ∥  
右 turşucuk ∥

## 図24

左 Bilmeye bildirmece ∥  
中 dil üstünde ∥  
右 kaydırmaca ∥

## 図25

左 Biz bizidik bizidik ∥  
右 otuziki kız idik ∥

## 図26

左 Ezildik büzüldük ∥  
右 iki duvara dizildik ∥

## 図27

左 Karşıdan baktım taş ||  
中 yanına gittim dört ayak ||  
右 bir baş ||

## 図28

左 On ay yatar ||  
右 iki ay kalkar ||

## 図29

左 Feneri yakar ||  
右 etrafa bakar ||

## 図30

左 Üstü çayır biçilir ||  
右 altı çeşme içilir ||

## 図31

左 Kul görür ||  
右 allah görmez ||

## 図32

左 Ufacık mermer taşı ||  
右 içinde beyler aş ||

## 図33

左 Pişirirsen aş olur ||  
右 pişirmezsен kuş olur ||

## 図34

左 Baldan tatlı ||  
右 baltadan ağır ||

## 図35

- 左 Elde tutulmaz ||  
右 çarşıda satılmaz ||

## 図36

- 左 Mendile konulmaz ||  
右 tadına doyumaz ||

## 図37

- 左 Bir kızım var ||  
中 gelen öper ||  
右 giden öper ||

## 図38

- 左 İstanbul'da ||  
右 süt pişti ||

## 図39

- 左 Kokusu buraya ||  
右 düştü ||

## 図40

- 左 Parasını el alır ||  
右 dumanını yel alır ||

## 図41

- 左 Ufak ufak odalar ||  
右 birbirini kovalar ||

## 図42

- 左 Mavi tarla üstünde ||  
右 beyaz güvercin yürür ||

图43

左 İçi ateş ||

右 dışı taş ||

图44

左 Biri kuru ||

右 biri yaş ||

图45

左 Gökte gördüm bir köprü ||

右 rengi var yedi türlü ||

图46

左 Ağaç üstünde ||

右 kilitli sandık ||

图47

左 Bize bir misafir geldil ||

右 yeşil feraceli ||

图48

左 kırmızı entarili ||

右 siyah düşmeli ||

图49

左 Hanım içerde ||

右 saçı dışarda

## 5. 考 察

### 5.1 母音論和

第1に、全20種のナゾナゾに見られる母音調和の構造的分布についてまとめると、総音節数331に対して男性母音の使用は163、女性母音の使用は168となっており、前者がおよそ49.24%であるのに対し後者はおよそ50.75%と、ほぼ同数の割合で使用されていることがわかる。

次に、これらを四角の囲みで示した単位ごとに集計してみると、囲みの内部で母音調和を乱している例は、

4.1    4.4    4.5    4.6    4.9    4.15    4.16  
4.17    4.18    4.19

と、ちょうど半数に上るが、囲みの総数127に対して調和を乱している囲みの数はわずかに22となっており、これは全体のおよそ17.32%にすぎない。つまりは、ここに示したコーパスにおいては、母音調和がきわめて厳しい制約のもとに使い分けられているということにほかならない。

さらに、4.1における《a-i-é》、4.2における《ü-ü-ú》対《u-u-ú》、4.5における《a-ı-á》、4.7における《i-i-ı》、4.9における《e-e-a-ı》…など、短い言語形式の中で「こだま式」に同一の母音音素が男女別にきわめて見事な構造的配列を示している例は、枚挙にいとまがないほどである。

この点で、いささか趣を異にするのは4.12の“İstanbul'da”で、1語の途中に囲みの切れ目が来てしまっている。これは、この語彙がもともとギリシア語起源であるところから、変則的に第2音節にアクセントが落ちているためである。

### 5.2 音 節 数

全体を鳥瞰すると、1作品に用いられている音節数では14音節がトップで、資料番号4.7、4.13、4.14、4.15、4.16、4.17、4.18の、計7例を数える。しかし、残る13例に関しては特段の傾向性は見られない。

そこで次に1行あたりの音節数に目を転じてみると、総行数49に対して7音節で構成されている行が17例となっており、群を抜いている。さらに、これに続いて6音節が6例、8音節が5例となっており、これら6～8音節を合わせ

ると28例の多きを数えることになる。ちなみにこの数は、なんと全体のおよそ6割を占める57.14%強に当たっている。

小論の筆者は、これだけの截然とした傾向性が析出される以上、上に指摘した6～8音節が基調となってトルコ語のなぞなぞが作られたという事実には、それなりの必然性があったものと推論する。そうして、こののっぴきならない必然性の解明には、学際的な知見の援用が不可欠ではないかと考える。すなわち具体的に述べれば、それは大脳のはたらきのうち、なかんずく記憶に関わる人類の営みに見いだされる、一般的な傾向性によるものではないかという見通しである。

記憶にはさまざまなタイプがあり、特に心理学等においてつとに指摘されていることがらとしては、「短期記憶」と「長期記憶」との別がよく知られている。短期記憶は、一般に長期記憶に比べて情報の保持される時間が短いところから命名されたものだが、内容的には必ずしも長期記憶の前段階的な記憶とは限らない。

例えば、暗算や会話場面における言葉のやりとりのように、特定の作業や課題を行なうためにだけ記憶される短期記憶は、作業記憶 (working memory) と呼ばれ、当初の目的が達成されればただちに不要となり、消去されてしまうタイプの記憶ということができる。

これに対して、当面の課題を達成するためという刹那的な目的とは異なり、自分にとって比較的長期間保持しておきたいと判断するような有用な情報は、一度その前段階的な短期記憶に貯蔵され、そこでふるいにかけられたのち海馬と呼ばれる部位に送り込まれ、長期記憶として固定される。ただし、この短期記憶は一般に忘却速度が速く、さらに保持できる情報量にも上限があることが知られており、 $[7 \pm 2]$ チャンクという価がほぼ定説として認められている。なお、ここに言うチャンクとは、「ひとまとまり」という程度の意味である。

こうして、改めてトルコ語のなぞなぞに具現化された行あたりの音節数をながめて見ると、口承文芸一斑を示す特徴としての伝承性の良さという部分が、人類一般に具備されている大脳における記憶のメカニズムと決して無縁ではないことを窺知することができるのである。

### 5.3 文節の再検討

橋本進吉 (1934) によって創唱された「文節」という言語学的単位は、欧米に追従することが一般であったわが国の言語学にとっては、まさに頂門の金椎



として世界に誇る快挙であった。

その形式的な特徴を、亀井、河野、千野編著(1996:1183)から引用すると、

- (1) 一定の音節が一定の順序に並んで、それだけは、いつも続けて発音される(その中間に音の断止がない)。
- (2) 文節を構成する各音節の音の高低関係(すなわちアクセント)が定まっている。
- (3) 実際の言語においては、その前と後に音の切れ目(音休止)を置くことができる。
- (4) 最初にくる音とその他の音、または、最後にくる音とその他の音の間には、それに用いる音にそれぞれ違った制限があることがある(たとえば、文節の頭には/ɔ/がこない、など)。

とされている。従って、橋本進吉氏の主張をひとことで要約すれば、文節の要は「音韻的特徴を目じるしにまとめられた発話断片」ということになる。しかしながら、先に引用した亀井、河野、千野編著(*idid.*)ではさらにこの後で、服部四郎(1949)を参考にしながら

文節は音休止を基準にした単位であるが、それは、日本語における基本的かつ形式的な型であり、多くの場合、(意味関係を考慮せずに)自動的に決定することができる。しかし、たとえば「雪のようだ」とか「食べてしまう」のように、1文節か2文節か決定しがたい場合もある。…以下略。

とつけ加えており、単位の画定にかかわる不安定性について批判的な態度を示している。

これに対して、柴田武氏は服部四郎(*idid.*)における批判の大半は de Saussure のいう *langue* ではなく、*parole* のレベルにある問題だと主張して、トルコ語を視野においた分析を行なっている柴田武(1948:165)の中では、

「文節」はおそらくあらゆる言語に認められる言語単位だと思う。もちろん言語によっては、あらゆる場合、あるいはほとんどの場合、「文節」が語と一致し、又は文と一致することがあろう。そのような場合は「文

節」という言語単位は形態論的記述にあたって十分有効とは言えないだろう。トルコ語にとっては「文節」はかなり有効な言語単位と考えられるから、文節によってトルコ語の形態論的記述を試み、語の分類（品詞分類）に及びたいと思う。

と述べて、積極的にこの単位を利用したトルコ語の分析を展開している。小論の筆者も、1970年度に東京大学の法文Ⅳ号館413番教室にて開講された柴田武先生の「アルタイ語対照文法」に出席した折に、上の論文を発表してからすでに22年もの歳月が経過していたにもかかわらず、先生がこの文節に対してこめられている熱い思いをひしひしと感じ取ることができたほどである。

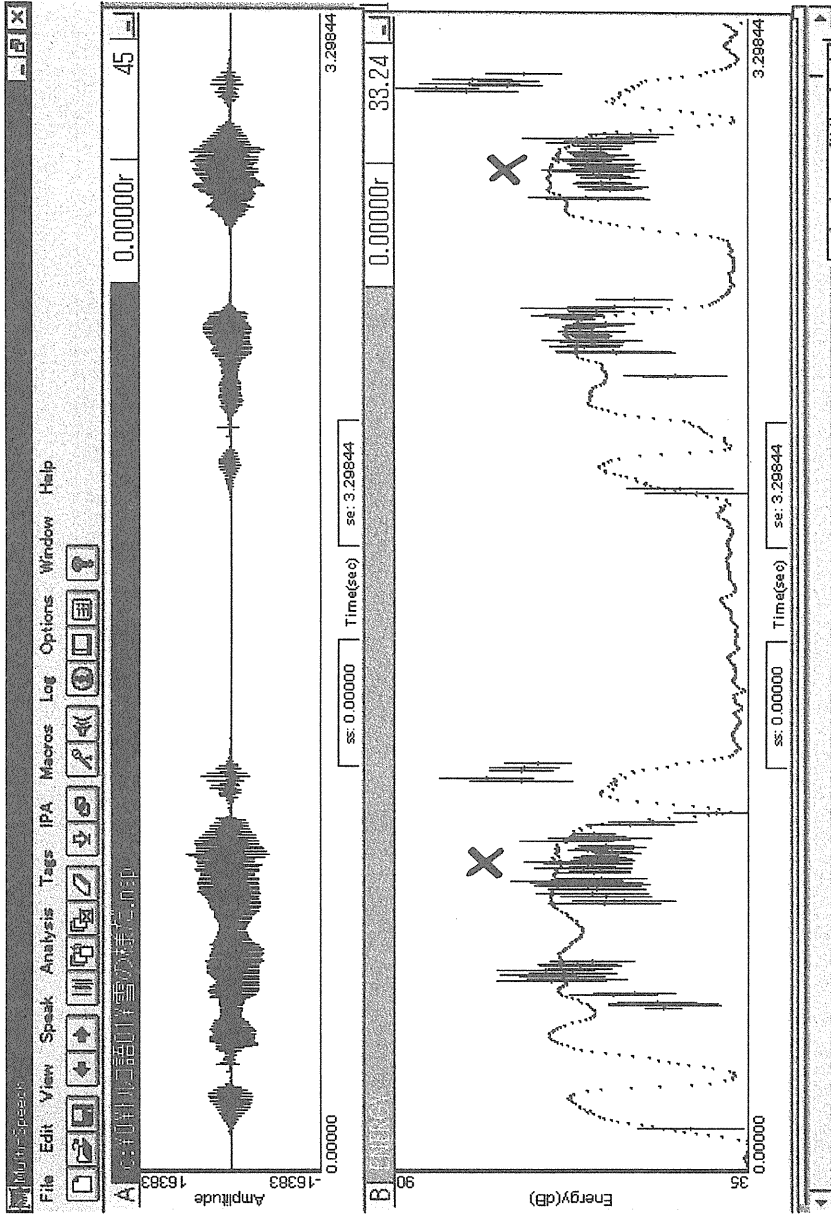
ところで、文節という単位がこれまでに述べてきたように、音声言語にその基盤をおいて考察されているにもかかわらず、これまでに実験音声学的手法を援用したうえでこの問題に対する所見が述べられた例は、管見のおよぶ範囲では殆ど見当たらない。そこで、試みに上に引用した亀井、河野、千野編著(*idid.*)において指摘されている「雪のようだ」と「食べてしまう」を、前節に示した図21~49と同様に formant history で捉えて解析した結果を、次に掲げる図50と図51に示す。

それぞれの図における上段には原波形が、下段にはそれに対応する formant history が示されているが、後者にはさらに dot によって音圧が表示してある。具体的に述べると、図50にあっては左側が/ユキノヨ<sup>ー</sup>ダ/、右側が/ユキノ<sup>||</sup>ヨ<sup>ー</sup>ダ/（ただし、|| はポーズを示す）であり、図51では左側の方に/タ<sup>||</sup>ベテシマツタ/、右側の方に/タ<sup>||</sup>ベテ<sup>||</sup>シマツタが表示されている。

ここで、図の見方を繰り返しておく、すでに前節に示した図21~49で述べたとおりに、特に下段の formant history に注目して縦方向に伸びる線分の集合を巨視的に捉えてパターン化することである。このようにして、細部ではなしに全体のゲシタルトに注目して音響情報を整理すると、改めて左右差が殆ど見られないことに気づく。

今日では、Firth (1948) 流の prosody に対する見方は決して珍しくはなくなっているが、文節が提唱された1932年当時にはこの術語がまだ知られていなかったために、時の追従者たちによって問題とされた点が、せいぜいアクセントとポーズぐらいに限定されてしまったということは、今日的レベルにおいて改めて認識しておかなければならないだろう。

なぜなら、先に引用した亀井、河野、千野編著 (*idid.*) の第4項において、



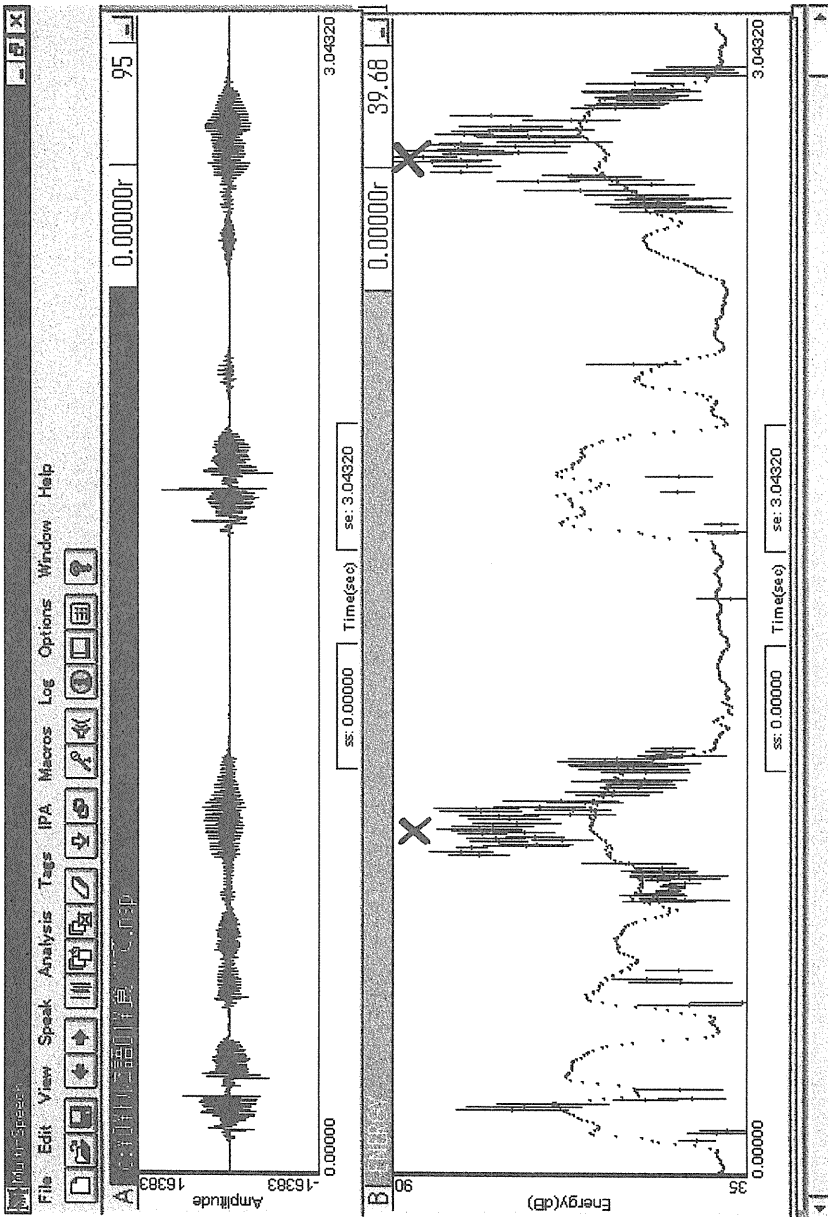


図51

いみじくも/d / (筆者の考えでは、ここは音声学的レベルの問題なので [d] とすべきだと見るが) など、音種にかかわる問題も「文節」には含まれることが明示されているからにはほかならない。

つまり、このことを実験音声学的レベルで捉え直してみると、音響データ上に反映された情報のうちでは基本周波数 (pitch)、音圧変化に加えて、母音と子音の特徴、ポーズおよび発話時間長などがことごとく吟味されなければならないということである。

従って結論を述べれば、図50～51からも十分に窺知されるように、ここに示された formant history に凝縮された左右のパタンにおける類似性こそが、音響レベルにおける互いの相関性を如実に反映しているものと捉えることが、ひとつの解釈法としては有効であるということにはほかならない。すなわち、別言すれば、文節こそは音声情報処理系にかかわる事象を、おそらくはわが国において初めて、真正面から文法論的単位を画定する際に利用しようとした先駆的見解であったということである。

しかしながら、すでに述べたように、その後多くの追従者たちによってこの考えはアクセントとポーズを中核とする狭義のプロソディーとしてすり替えられ、中途半端な形の検証によるいわば不完全な評価を被ってきたように思われる。ちなみに、この機会にあえて年来抱き続けてきた文法理論の組み立て方に対する不満を敷衍して述べておくと、一般論的に見て文法論ではどうして書き言葉のみを編重し、その土台となっている音声言語を、少なくとも定量化された音声言語情報というレベルでは積極的に取り込もうとしないのだろうか。この点が、筆者にはどうしても合点が行かぬところなのである。

こうした意味合いからも、橋本進吉氏は音声情報を積極的に文法論に取り込もうとした先駆者として位置づけられてしかるべきではないかと思われる。

最後に、再び前節において図示しておいた、トルコ語を解析した図21～49に戻ると、それぞれ「×」印でまとめられたひとかたまりは、例えば図24の資料番号4.3にあっては、

Bilmece bildirmece ||

知る(なぞ) 知らせる

dil üstünde ||

舌 上で

kaydırmaca ||

滑らせる

となるが、図37の資料番号4.11にあつては、

Bir kızım var ||

一人の 娘 いる

gelen öper ||

来る人 キスする

giden öper ||

行く人 キスする

となつて、橋本進吉氏の文節に完全には一致しない。そこで、最終的な見解としては、文節のような音声情報を根幹に見据えた文法的単位の有用性を尊重しつつ、その内容が時としていわゆる「句音調」のレベルから、果ては節全体をひとつかたまりとするようなレベルにまで分散することが予測されるところから、本稿においてはこれを「韻律節」と命名して、この単位による文法的記述にも道を拓いておきたいというのが、トルコ語のなぞなぞを分析して得られたところの、いわば副産物である。

## 6. おわりに

以上で、トルコ語のなぞなぞ分析をとおして、

- (1) Jakobson 流の *poetical analysis* を適用することによって、母音調和を核とする見事な音韻的構造を析出した
- (2) 上の構造が、音響音声学的レベルからも実証できることを定量的に示した
- (3) なぞなぞの各行を構成する音節数は7がもっとも多用されていた。このことより、口承文芸としての側面を有するなぞなぞの性格上、この結果は人類に普遍的に備わっていると目されている短期記憶における [7 ± 2] チャンクと無関係ではなからうとの所見を示した
- (4) 橋本進吉氏によって提唱された文節の概念を、その音響事象に注目することによって再評価し、単に *pitch* やポーズの側面以外にも種々の韻律的特徴を統合した上で、音声情報を手がかりとして文法的単位を画定するという、まさに先駆的な文法論的見解とした。なお、いわば副産物

として「韻律節」という、より幅広い音声情報に立脚した文法的単位の措定を試みた

などとなる。ただし、最後に音響データの扱いに関してひとこと付言しておく。

従来の音響音声学的研究では、当の研究者が、とかく解析された音響データをあたかも「真理」と同義であるかのように錯覚してしまうことが多かった。しかし、これでは人間の言語理解にとってもうひとつの大切な側面である「受容・認知」のレベルが見落とされている。ここから、例えば音韻理論との乖離が始まった。

しかし、今日では周知のように、脳神経科学とコンピュータ・サイエンスの長足の進歩によって、例えば事象関連電位を用いた大脳における高次機能の働きを、非侵襲の電気生理学的方法によって観察することができる時代になってきた。城生佰太郎(1997)などは、その一部を自らの手によって実行した脳波実験によって示したものだが、本稿において示唆されたトルコ語のなぞなぞにおける母音調和と、音節数を核とした見事なほどに整然とした音韻的な構造は、聞き手の大脳にとっても相応の伝承効果を挙げているはずである。

従って、ここに指摘した事象のすべてが真の意味での「実証」に値するようになるためには、まだまだこれら音響実験に加えて、しかるべき脳波実験パラダイムが組まなければならないものとする。そのような意図から、現在この研究はもう一方の受容・認知にかかわる側面からの実験パラダイムを準備しているが、小論のしめきりには到底間に合わない。またの機会に、稿を改めて論じることとする。

#### 【註】

- 1) 現在、モンゴル語を対象とした分析は『アルタイ語対照研究——韻律節の構造——(仮題)』として執筆中である。また、フランス語の諺を対象とした分析も部分的に試みており、城生佰太郎(1996)にその一斑が示されている。
- 2) ただし、本文中に示したデータはすべて Multi Speech によっている。理由は、専らファイルの互換性に関わる技術的な問題で、結論的には CSL よりも使い勝手が良いことにある。従って、CSL は細部の確認だけに用いることとした。

## 【文献】

- 亀井孝, 河野六郎, 千野栄一編著 (1996) 『言語学大辞典』第6巻, 三省堂
- 柴田 武 (1948) 「トルコ語の文節とその構造」『日本学士院紀要』第6巻, 第2, 3号, pp. 163-186
- 城生佰太郎 (1984) 「モンゴルのなぞなぞ」, 『世界なぞなぞ大辞典』, pp. 257-274, 大修館書店
- (1996) 「ことわざの言語形式」『言語』第25巻7号, pp. 28-34, 大修館書店
- (1997) 『実験音声学研究』, 勉誠社
- 橋本進吉 (1934) 『国語法要説』(後に橋本1948に再録), 明治書院
- (1948) 『国語法研究』, 橋本進吉博士著作集第2巻, 岩波書店
- 服部四郎 (1949) 「『文節』について——特に日本語および英語に関して——」(『言語学の方法』, pp. 415-427, 岩波書店, 1960に再録)
- Firth, J. R. (1948): “Sounds and prosodies”, *Transactions of the Philological Society*. pp. 127-152. (*Papers in Linguistics* 1934-1957, London: Oxford Univ. Press. 1957), 大東百合子訳『ファース言語論集 I (1934-1951)』, 研究社所収, 1978
- Jakobson, Roman (1960): “Linguistics and Poetics”, in T. A. Sebeok (ed.), *Style in Language*. MIT Press, Cambridge, MA, 川本茂雄監修『一般言語学』, pp. 181-221, みすず書房, 1973